

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 169 September 2023

研究の最前線

「14世紀の危機」の語り方：2023年度夏期国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14世紀の危機」を思考する」報告記

はじめに：シンポジウムのパースペクティブ

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 2023年度夏期国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14世紀の危機」を思考する」が終了しました。あらためて支えて下さった全ての皆さんに心より感謝申し上げます。

今回のシンポジウムは「14世紀の危機」に焦点を当てるものでした。「14世紀の危機」とは、「中世温暖期 (Medieval Climate Anomaly/Medieval Warm Period)」から「小氷期 (Little Ice Age)」への気候変動期にあたる14世紀に起きた、ユーラシア規模での、1) 気候変動、2) 社会動乱、3) 疫病流行の3要素の複合からなる「危機」であり、世界史の転換期の1つに数えられるものです。

ただしこの「14世紀の危機」は、元来西洋史の文脈で語られていたものでした。この文脈における「14世紀の危機」とは、まずは1315～22年に北西ヨーロッパの大部分を襲った「大飢饉 (Great Famine)」であり、この危機を決定付けたのは1348年からの「黒死病 (Black Death)」の流行です。一方でこうした危機による人口減は、それ以前に飽和状態

The poster for the 2023 Summer International Symposium is titled "The Phase of Catastrophe: The Crisis of the 14th Century in Afro-Eurasian Context" with the Japanese subtitle "崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14世紀の危機」を思考する". The event is held on July 13-14, 2023, at Room 403, Slavic-Eurasian Research Center (SERC), Hokkaido University, Japan. The program is divided into two days: Day 1 (July 13, Thursday) includes opening remarks and three sessions: "Reconsidering the Crisis from the West", "The Crisis in East Asia", and "New Methods to Calibrate the Crisis". Day 2 (July 14, Friday) includes Session 4 "The Crisis from the Viewpoint of Connectivity" and Session 5 "Crisis in Northern World from Macro and Micro Perspectives". The symposium is organized by the Slavic-Eurasian Research Center and supported by the Japan Commission for International Cooperation in Education, Science and Culture. A QR code for registration is provided at the bottom right.

にあったラテン・キリスト教世界の人口増を止め、人口と資源との間の均衡を回復させることで、「西洋」のその後の跳躍を準備したともいわれます。

しかし、この危機を長期の停滞と捉えるにせよ跳躍への準備期間と捉えるにせよ、この時代の直前にはアブールゴドが「13世紀世界システム」と呼んだアフロ・ユーラシア規模での複数の経済・交易圏の連環が実現していました。この「システム」を転換させた世界的現象として「14世紀の危機」を捉えるには、西洋の文脈のみならず、アフロ・ユーラシアの規模での思考が求められているのです。この種の思考が当シンポジウムの主目的ということになります。今回のシンポジウムの議論を通じて、「14世紀の危機」の要点として、以下の5点が浮かび上がってきました。1) 地域的な多様性、2) 時代的な多様性、3) 史料の語り方、4) サイクルへの注視、5) あらたな時代・勢力の胎動。本稿では以下、これらの5点について概観していきます。

1. 地域的な多様性：異なる気候

シンポジウムは5セッションに3つずつ、合計15本の報告とそれぞれのセッションのディスカッサントによるコメントに続いて、セッションごとに議論がなされました。それらを通じて、危機を語るに際しての地域的・時代的な多様性がありありと見えてくることになりました。

まずは地域的な多様性です。例えば先述の「大飢饉」（1315～22年）に関して、同時期のビザンツ帝国領は旱魃（1315、1317年）という多雨の北西ヨーロッパとは種類の異なる異常気象を経験しています（プライザー＝カペラー報告）。「大飢饉」の地域偏差に関してはロシアも同じであり、この地においては1305年から09年までと北西ヨーロッパよりも早い時期に、しかし同じく多雨によって「大飢饉」がもたらされているのです（シャクマトフ報告）。一方で東アジアは、寒冷化が著しかったヨーロッパとは異なり、1290年から1320年まで一貫して平均気温が上がり続けます。しかもこの地域において一般的に気温とは逆相関の関係にある降水量も、1320年代においては下降せず（図1参照）、この時期において大元ウルス（中国）領内では洪水と飢饉とが頻発しているのです（宇野報告）。

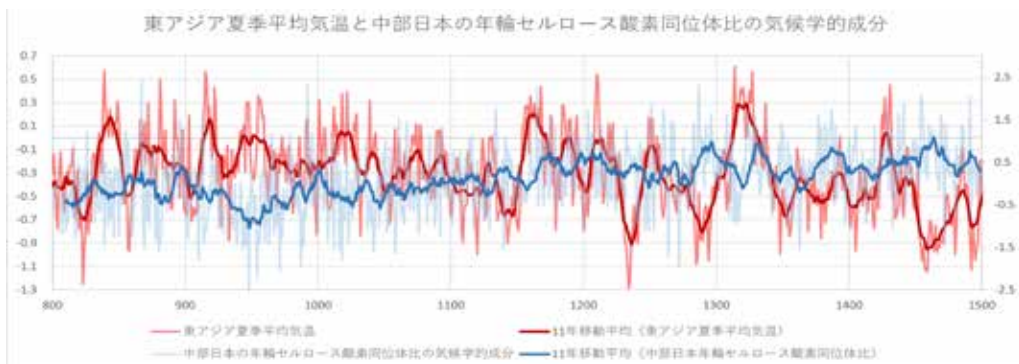


図1：東アジア夏季平均気温と中部日本の年輪セルロース酸素同位体比の気候学的成分の経年変化（アメリカ海洋大気庁のHPに公開されている“Central Japan 2,600 Year Composite Tree-Ring Oxygen Isotope Data”および“Asia 1200 Year Gridded Summer Temperature Reconstructions”を基に諫早が作成）

ただし、より北方のアムール川河口域に関しては、この地の「異民族」の動静を伝える史料が13世紀から14世紀にかけての寒冷化を伝えています（中村報告）。東アジアの気候も概括的には理解できないのです。加えてヨーロッパと東アジアのあいだに位置する西アジアの特にバグダード地域においては、1260年代末から80年代に関して顕著な寒冷化が見られます。1280年代という時期は、フレグ・ウルス（イラン・イラク）においても、ジョチ・ウルス（ロシア）においても大元ウルスにおいても政治危機が見られ、この時期は太陽活動が減退する「ウォルフ極小期（Wolf Solar Minimum: 1282頃～1342年頃）」の開始時期とも重なります。ただし、寒冷化現象はアフロ・ユーラシア規模では一般化できません。先述のように東アジアは1290年代からは温暖化に転じますし、中央アジアはこの時期例外的に高温多湿でした。そしてこの地を拠点としたカイドはこの時期に権勢の絶頂を迎えるのです（諫早・中塚報告）。全球規模での気候変動という文脈では、おそらく過去2500年で最大規模のものであったとされる1257年頃に起きたインドネシア・サマラス山の大噴火にも注目です。この火山噴火の影響はヨーロッパにおいてすら、1258年の冷夏と不作としてドイツ西部の史料にも確かに現れているのです（大貫報告）。

さらに「黒死病」に関しても、この悪疫がジェノヴァ・ヴェネツィアという二大海洋国家を襲ったのは1348年であるわけですが、もちろんペストを運んだ船舶が出港した黒海北岸域にはそれよりもはやく、1346年の春ないし夏にはペストはウルゲンチやサライ、アザクといったジョチ・ウルスの諸都市に至っていました（ファヴロ報告）。そして最新の古遺伝学研究はこの第二次ペスト・パンデミックの震源地が、1316年から40年のあいだ、つまり14世紀前半の天山山麓であったことを示しているのです（スラヴィン報告）。それはチャガタイ・ウルス（中央アジア）の拠点でした。

2. 時代的な多様性：「危機」の時代

前節でみてきたようにアフロ・ユーラシア規模で気候変動の時期や起こり方は多様です。そしてそれは「崩壊の局面」の顕在期のずれとも密接に関わります。ビザンツ帝国において、「崩壊の局面」は1341年から57年にかけての内訌期にありました。そしてそれは「黒死病」の時期とも重なります（プライザー＝カペラー報告）。しかしその一方、黒海の反対側に目を転じると異なった状況が見えてきます。「黒死病」の時期を切り抜けたジョチ・ウルスは、1356年から57年にかけてフレグ・ウルスの王都タブリーズを占領し、最大版図を誇るのです。その後のジョチ・ウルスの「崩壊の局面」には政治危機がありました。1360年には右翼と左翼の王家であったバト家とオルダ家とがともに断絶するのです（ファヴロ報告）。このウルスの史料が環境危機を伝えることはありませんが、翌1361年には大規模なゾドノ寒雪害がウルス領内で起こっていた可能性が指摘されています（シャクマトフ報告）。

3. 史料の語り方：利用の仕方

こうした「崩壊の局面」を同時代史料がいかに語るのか。このことも注目すべき問題です。1340年代および1350年代の危機の時代における異常気象を、ビザンツ史書は神の怒りとして表象しています（プライザー＝カペラー報告）。一方のジョチ・ウルスにおいて1359年からの「大紛乱（*Velikaia zamatnia*）」は政治危機としてのみ語られ、その原因はベルディベクによる兄弟殺し・子殺しに帰されています（ファヴロ報告）。フレグ・ウルスに関しては、

宮廷のペルシア語年代記は自然災害をほとんど記しません。君主の徳を讃え上げる公式年代記においてはおそらく、それを貶めるような災害の記録は好まれなかった可能性があるのです（ランダ報告）。さらに大元ウルスにおいて14世紀の史料はただ喪失や崩壊を語るのみならず、例えば汪大淵の大紀行に見られように、ユーラシア東西に広がったネットワークを背景にした挑戦をも克明に記しています（フィアスケッティ報告）。大元ウルスからフレグ・ウルスに渡り、最終的にはマムルーク朝（エジプト・シリア）において権力を握ったアルゲンシャーはこの意味でまさに「14世紀的人物」の典型とも言えるのです（邱報告）。



議論のようす

4. サイクルへの注視

「危機」を単年ではなく周期として捉える考え方も重要です。特に東アジアの歴史を見た場合、10～20年豊作の年が続いた後に収穫量が元に戻るような現象が社会にとって最も大きな打撃を与えてきたことが知られます。短期でも長期でもなく、16～64年周期での気候変動が社会に打撃を与えたとする説です（中塚報告）。そしてこのことは東アジアに限りません。ドイツ西部の社会は1224年から26年にかけて大規模な飢饉に見舞われますが、これは1220年代より前の温暖な気候からの急激な寒冷化と多雨傾向が影響しているのです（大貫報告）。一方でサイクルは「危機」を生み出すと同時に「日常」をも生み出します。ユーラシア規模にネットワークを開いた大元ウルスでは、季節移動を行う遊牧のサイクルとモンズーンに規定された海域のサイクルとが重なりあうことで、徴税や交易政策、使節派遣などに独自のリズムが生まれていたのです（四日市報告）。

5. あらたな時代・勢力の胎動

このように14世紀は「中世温暖期」から「小氷期」への移行期であるわけですが、それは中世から近世への移行期でもありました。ネットワークをアフロ・ユーラシア規模に拡張・統合した「モンゴルのグローバル化（Mongol globalization）」は各所に「中間地点（middle ground）」を生み出し、それは交渉の場とも衝突の場ともなりました。そしてその地点で起こったことの影響が他所にまで連なっていくことも、この時代のグローバル化の特徴です。それ

は「黒死病」のような危機に関しても同じでした（ディ・コズモ報告）。

この「危機」によってモンゴル帝国は崩壊していくわけですが、それに替わる新たな勢力がユーラシアに胎動します。例えばジョチ・ウルスにおいては 1350 年代の王家の断絶が傍系の出自にあった者たちに栄達のチャンスを与えました。モンゴル帝国の復興を期して西方ユーラシアに大帝国を建設することになるティムールもこうした状況のなかで台頭してくるのです（ファヴロ報告）。ビザンツ治下で人口と経済の規模を大きく減少させたアナトリアは、オスマン治下の 1500 年以降に回復を見せ、同帝国は東地中海の覇権を握ります（プライザー＝カペラー報告）。さらに中国でも江南から興った明朝が大元ウルスを打倒します。こうしたユーラシアの新勢力が、マワーラーアンナフルやアナトリア、江南といずれも「危機」以前には政治中心にはなかった場所から台頭してくることは注目に値します。西洋中心史観においては、「14 世紀の危機」からの回復後に西洋の跳躍を担うのはこれまでの小国であったポルトガルです。しかしアフロ・ユーラシア規模で思考するとき、こうした周縁の台頭および世界帝国化は西洋だけの現象ではなかったことが理解されます。旧勢力にとっての「危機」は新勢力にとっての「未来」でもあったのです。[諫早]



シンポジウム後の集合写真

「ウクライナ・イニシアティブ」：ウクライナ専門家の招へい

2022 年 2 月 24 日に開始されたロシアによるウクライナ侵攻はアカデミアをも激震させた。アカデミアの各分野はこの事態をどう受け止め、どのように新しいビジョンを見出していくべきなのか。こうした問題を考えるために、スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）では、この一年半の間、数多くの国際・国内セミナーを組織してきた。世界的に言えることだが、ウクライナの専門家は少なく、この問題をロシアの専門家、EU の専門家、アメリカの専門家がそれぞれの観点から論じる傾向が強い。したがって、ウクライナの主体的な視点に焦点を当て、それを学術的考察に組み込んでいくという課題は重要な意味をもつ。SRC の学術イベントのなかでも、2023 年 2 月 21 ～ 22 日に組織された国際シンポジウム「ウクライ

ナとロシアの生存戦略：開戦から1年を迎えて」は一つの節目となるものであった。それに続く大型の企画として、2023年度にはウクライナの専門家の招へいが検討された。具体的には、デビッド・ウルフ教授を中心に「ウクライナ・イニシアティヴ」として構想され、SRCの外国人研究員プログラムおよび国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築の枠組みで、ハーバード大学ウクライナ研究所所長のセルヒー・プロヒー氏とロンドン・ウクライナ研究所所長のオレーシャ・フロメイチュク氏を招へいする形で実現した。プロヒー氏は5月25日から7月27日まで約2か月、フロメイチュク氏は6月1日から7月3日まで約1か月間、日本に滞在した。さらに、同時期にSRCに来訪した、UCL スラブ東欧研究所ウクライナ東欧文化セクション准教授のウィリアム・ブラッカー氏もチームに加わった。

プロヒー氏はセンター滞在中にロシアによるウクライナ侵攻とザポリージャ原発の問題に関する新著に取り組む傍ら、日本での発信に心血を注いだ。侵攻に際して歴史解釈を悪用したプーチン政権に対して、歴史家は挑戦を受けている、研究室を出て発言をしなくてはいけない、という信条をもっているためだ。実際に我々は、フロメイチュク氏とブラッカー氏の到着を待って、議論の場を求めて研究室を飛び出し関東・関西へと出向いた。

6月8日から東京に行き、6月9日には外務省内で、6月10日には東京大学本郷キャンパスで、「ロシア・ウクライナ戦争：歴史の回帰」と題して、ロシア・ウクライナ戦争に関する講演会をそれぞれ開催した。外務省でのプロヒー氏の講演には外務省の若手職員20名程度が出席し、フロメイチュク氏、

ブラッカー氏も含めて議論を行った（併せて外務省の各部署の職員とも面談・意見交換を行った）。プロヒー氏、フロメイチュク氏が講演を行なった東京大学のセミナーでは、国内の関連学会—ウクライナ研究会、東欧史研究会、ロシア史研究会、東京大学文学部西洋史研究室が共催に名を連ね、約70人の国内外の人文社会系の研究者が聴衆として集まった。さらに、6月12日には、駐日ウクライナ大使と面談してウクライナ情勢について意見交換をするとともに、午後には日本記者クラブでプロヒー氏による「ロシア・ウクライナ戦争の起源と影響」をテーマとした記者会見を開催した。この記者会見には逐次通訳付きで対面・オンライン併せ100人以上の聴衆が集まった。さらにその後、日経新聞社、朝日新聞社、NHKからさらに個別でインタビューを受けることになっ



議論のようす



日本記者クラブでの記者会見

た。NHKによるインタビューは朝の情報番組「おはよう日本」(7月8日)で紹介され(インタビューの詳細は以下を参照。https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/qa/2023/08/10/33599.html)、朝日新聞の取材は特集記事として「オピニオン&フォーラム」(7月19日)に掲載された(<https://www.asahi.com/articles/DA3S15692722.html>)。どこでもウクライナ戦争への関心は高く、それぞれの会場で人々は熱心に話に耳を傾け、質疑応答に参加した。

プロヒー氏の講演は、2023年5月16日に出版されたばかりの新著 *The Russo-Ukrainian War: The Return of History* の内容に基づくものである。記者会見の様子はYouTube(https://www.youtube.com/watch?v=23jYT_2nSyo)で公開されている。また、東京大学での講演の内容に関しては、『ロシア史研ニューズレター』No.130(July 2023)に詳細を書いたので、内容に関心がある場合はご参照いただきたい(https://www.roshiashi.com/_files/ugd/0f1b8f_ba3911f582e341d2ad8e83aca833a08f.pdf)。

これらの講演からは色々なことが学び取れると思うが、個人的にこの出張の過程で強く感じたのは、ロシアの軍事侵攻を批判し、ウクライナに対して多様な形での支援をするという意味では誰も合意しつつも、この地域の見方それ自体は、ロシアや欧米からの眼差しに(結果的に)沿うものになっている場合が案外多いということである。さまざまな会合や質疑応答の場では、ウクライナの(東と西の)文化的・政治的分断、ドンバスやクリミアの異質性、政治的腐敗、民主的基盤の強弱が繰り返し口に出された。質問には、ロシア、なかでもプーチンに関することが多く、そのことは、ウクライナの問題が結局のところロシアによって(あるいはプーチンによって)決せられているとの印象を人々がもっているということを示してもいた。確かに、現実にはウクライナには諸問題があろう。ロシアが侵攻をしているのだから、ロシアが状況を大きく左右していることも間違いない。ただ、フロメイチュク氏が「なぜ分断しているとはばかり言うのか、文化的多元性や意見の相違は他の国でもあるだろう」「なぜ皆ロシアの話ばかり聞くのか」と繰り返し述べていたことには、私たちの反省を促すものがある。(因みに、こうした、「旧ソ連圏」には欧米とは異なる問題があるということをも前提としたうえで研究課題が設定される傾向は、ウクライナに限らず、ロシアも含めたこの

地域全体に当てはまる。フロメイチュク氏が「旧ソ連圏」という言葉はいつまで使うのかと問うたように、この枠組み自体、議論されながらも、結局今まで使われ続けてきた。) 私たちはもっと別の角度からの視点ももつべきであったし、そこに何が無いのかではなく、何があるのかについて論じようとする姿勢も必要だっただろう。「ウクライナ・イニシアティヴ」はその意味で、日本の学会・官界・メディアに対してウクライナを主体とする声を届けたという大きな意味が



日文研レクチャーでの講演(左からプロヒー氏、磯前氏、フロメイチュク氏、ブラッカー氏)

あるだろう。

さらに関西では京都（6月15日、国際日本文化研究センター）で「原子力と人間の傲慢：世界最悪の災害を再訪する」（第163回日文研レクチャー）をテーマにプロヒー氏が講演を行い、現在の兵器・エネルギー源としての原子力についてその問題点を提起した。ザポリージャで育ったプロヒー氏にとって、原子力の問題は現代世界を考える重要な鍵の一つである。広島も福島も他人ごとではなく、そのことは氏が日本に来訪する動機の一つでもあった。討論者の磯前順一氏とブラッカー氏がともに文化論の立場から、大きな物語（モダニティ）の終わりに言及し、被災者、周縁、少数者の視線を強調したことは印象的であった。（国際日本文化研究センターでのレクチャーの記録は以下を参照されたい。<https://www.nichibun.ac.jp/ja/topics/news/2023/07/28/s001/>）長い出張の終わりの6月17日には、神戸学院大学を訪問し、ウクライナ研究会の会長である神戸学院大学教授の岡部芳彦氏らと今後のウクライナ研究の発展について意見交換を行った。

札幌に戻り、6月30日には、SRC主催で若手研究者ワークショップを開催した。日本におけるウクライナ研究の基盤構築と若手養成を目的としたこのワークショップには、5名の日本人研究者・大学院生、協定校ソウル大学から1名の大学院生が参加した。鳥飼将雅氏（大阪大学）はウクライナ戦争後の地方政治家の動向について、松壽英也氏（津田塾大学）はウクライナ外交政策における中国との戦略的パートナーシップについて、長島徹氏（外務省）はロシアの国籍政策の変遷とそれへのウクライナ戦争の影響について、Lee Junseok氏（ソウル大学）は旧ソ連圏における共産党系政党の選挙パフォーマンスについて、村田優樹氏（ウィーン大学）は1905年から1921年にかけてのウクライナの民族政策とロシア人・ウクライナ人のアイデンティティ問題について、上村正之氏（北海道大学）はベリンスキーの評論におけるウクライナ観について、報告をした。それぞれの報告に対して、プロヒー氏、フロメイチュク氏、ブラッカー氏を交えて集中的な意見交換がなされた。これらの若手研究者の見事な報告と討論でのパフォーマンスは、将来の日本や韓国のアカデミアにおいて世界水準のウクライナ研究が生まれることを保障するものであったと言える。それでも、三人のウクライナ研究者の質問やコメントに対しては、報告者のそれぞれがハッとした顔で考え込んでいた。参加者の一人が帰り際に、コメントを聞いて「そういう考え方をするんだなと驚いた」と述べたことから、ウクライナ研究者らの見方が新しく、現在のアカデミアの潮流に対して問題発見的な意味をもっていたのだろうと思う。その意味で、この若手ワークショップは、将来のアカデミアにおいてウクライナからのパースペクティヴをどう反映させていくべきなのかを検討する、もっとも意義のある試みだっただろう。

北海道大学内でも私たちは様々な対話を続けた。6月23日にはSRCで昼食懇談会を開き、アメリカ、イギリスでのウクライナ研究のあり方について、ハーバード・ウクライナ研究所、ロンドン・ウクライナ研究所、UCL スラブ東欧研究所の試みを話してもらい、SRCのスタッフや北海道大学の院生を交えて意見交換をした。また、6月27日には北海道大学本部で高橋彩副学長とプロヒー氏との会談の席が設けられ、SRCとハーバード大学との連携を強化しつつ、ウクライナ研究の発展に貢献していく方針が確認された。

現在、北ユーラシア地域研究の「脱植民地化」「脱ロシア化」が世界の学界でトレンドになっている。事実、今回の「ウクライナ・イニシアティヴ」に関わるなかでウクライナ戦争を振り返るとき、私たちが境界地域からの眼差しをないがしろにし、世界のグレート・パワーの

観点に関心を集中させてきたことが改めて感じられたように思う。事はウクライナ固有の問題に留まらない。SRC はかねてより境界地域研究に力を入れてきたが、この研究の方向性の重要性はさらに高まったように思う。北ユーラシアの境界地域はどこにも同様の文化的・政治的多元性、多様なグレート・パワーの複合的影響、境界の多孔性がある。グレート・パワーの側から境界地域を観察するだけでなく、辺境や境界地域から世界を臨むようなパースペクティブがもっと必要であるかもしれない。欧米以外の中東、インド、中国というファクターの影響も重要であろう。私が「ウクライナの経験は、将来、ユーラシアの他の地域の参照軸として utilize されると思うんですよ、あ、utilize という言葉は良くないかもしれないですが……」と言ったら、プロヒー先生は「この場合、まったく正しい語の使い方だよ」と大きく頷いた。[青島]

第 65 回北大祭・研究所・センター合同一般公開として「知られざるスラブ・ユーラシア」開催される

当センターでは今年も北大祭に合わせて、6月3日に一般公開「知られざるスラブ・ユーラシア」を開催いたしました。新型コロナウイルス蔓延以降、前年度までは中止や限定的な開催とせざるを得ない状況が続きましたが、感染防止対策を講じたうえで3年ぶりに通常公開が叶いました。当日はぐずついた天気にもかかわらず、延べ449名の方にお越しいただきました。

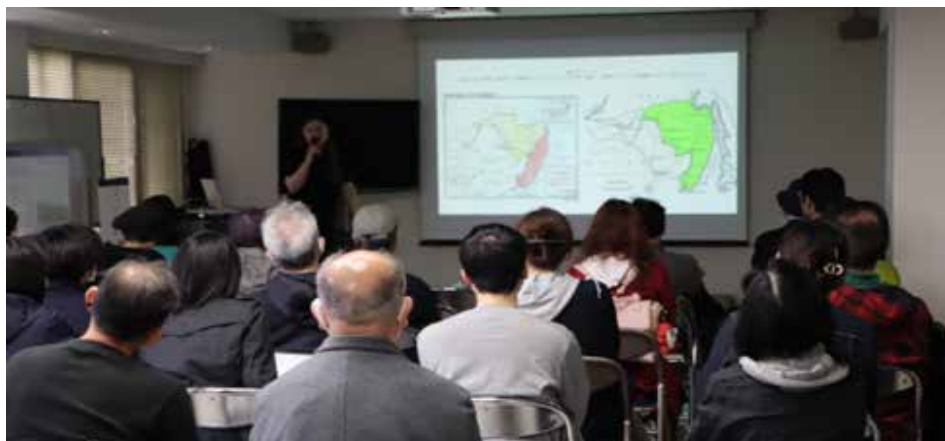
当センター4階の会場では、センタースタッフやゲストによる最新の研究成果に関するサイエンストークと、それに連動したパネル展、スラブ・ユーラシア地域の工芸品・民族衣装展示や体験コーナー、DVD上映などを行いました。

サイエンストークは、ウクライナを代表する日本研究者オリガ・ホメンコ氏による「知られざるウクライナと日本との出会い（1900-1948）」と、安達大輔准教授による「作家ゴーゴリの知られざる故郷」の2本立てで行われました。オリガ・ホメンコ氏は、帝政ロシア時代に極東へ移住した人々の多くが実はウクライナ人であったこと、帝政ロシア崩壊後には日本人は満洲でウクライナ人に出会う機会があったこと、またウクライナ人は日本にも亡命したことなどについて解説し、両国のつながりを知る機会となりました。安達准教授は、19世紀ロシアを代表する作家・戯曲家として知られるゴーゴリが現在のウクライナ・ポルタワ地方の出身であり、後に「ロシアの作家」として位置づけられてゆく過程を解説しました。現地の風景や暮らしの写真などを交え、ウクライナとロシアの文化交流の複雑な歴史に触れる機会となりました。合わせて70名以上が聴講し、来場者からは多くの質問が寄せられました。またトーク終了後も質問に並ぶ人や、トークと連動したパネル展を熱心に見学する人々で賑わいました。

体験コーナーでは、キリル文字を実際に書いて学べる「キリル文字ってどんな文字?」、伝統的な占いが体験できる「モンゴルのシャガイ（くるぶしの骨）占い」などを用意し、大いに盛り上がりました。この他にもシルクロードのDVD上映など、大人から子供まで楽しめるコンテンツを用意し、アンケートではいずれも高評価をいただきました。ご来場いただきました皆さまと、会場スタッフとして尽力されたセンター教員・研究員・院生の皆さまに

心から感謝申し上げます。

本行事は7研究所・センター合同一般公開の枠組の中で行われました。まとめ役を務められた電子科学研究所をはじめ、共催した他の研究所に深く感謝申し上げます。[村上]



(上) オリガ・ホメンコ氏のサイエンストークの様子、
(左下) 体験コーナー「キリル文字ってどんな文字?」、(右下) 民族衣装

UBRJ/EES 実社会のための共創研究センター・名古屋外国語大学 RINGS/NPO 法人国境地域研究センター合同セミナー「大学教育における地域連携の実践と関係人口」の開催

本セミナーは、『関係人口の社会学』（大阪大学出版会、2021年）の著者である田中輝美氏（島根県立大学）をメインの招へい者にして、2023年5月14日、名古屋外国語大学 RINGS で開催されました。そのほかに報告者として、EES-SRC 副代表でもある池 炫周 直美氏（北海道大学公共政策大学院）、地田徹朗氏（名古屋外国語大学）、石田聖氏（長崎県立大学）、花松泰倫氏（九州国際大学）、コメンテータとして古川浩司氏（中京大学）が登壇されました。研究・教育機関と地域との連携の進め方をどのように進化させていくか、様々な地域の実践からきっかけを得ようとする試みでした。

『関係人口の社会学』は、関係人口という比較的新しい概念（初出2016年）について社会的に研究した日本初の研究書であり、大きな反響を呼んでいます。関係人口とは、移住

した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもなく、「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」と定義されています。本書は、関係人口というよそ者が触媒となって、地域住民が地域社会を再生し主体性を回復させていくプロセスを提示するものです。田中氏は関係人口論の最前線と大学と地域の連携のありかたについて講演されました。登壇者からは各大学の取り組みが披露され、地域・大学・学生の三者すべてが満足する連携のありかた、その継続性のむずかしさなどの問題点が話し合われました。

関係人口という量的ではない概念は、数値化では捉えられない地域連携の新たな成果アセスメントをもたらす可能性を示すものかもしれません。ロシアのウクライナ侵攻以後、日々の研究で得た知見を社会に還元する必要性がさらに高まっています。この戦争の後に地域社会がウクライナやロシアとどのような関係を再構築するのか、地域と対話することの重要性や対話のありかたを見直す必要性を考えさせられる契機となりました。

なお、このセミナーの様子は、下記 URL から YouTube 動画として視聴することができます。
https://www.youtube.com/watch?v=cJN7j4_EhRo [井上]

国際 19 世紀研究学会 INCSA 第 1 回大会のお知らせ

2024 年 7 月 10-12 日にかけて、イギリスのダラム大学を会場に、対面とオンラインの併用で国際会議 “The Nineteenth Century Today: Interdisciplinary, International, Intertemporal” が開催される予定です。現在 9 月 25 日を締切として報告を募集しています。これはいわゆる「長い 19 世紀」を研究する初の国際学会である INCSA (International Nineteenth-Century Studies Association) の第 1 回大会となります。

INCSA は、人文・社会科学、自然科学の全領域にわたる、言語・地域・専門の壁を越えた多分野かつ国際色豊かな学会として設立されました。今後は大会を隔年で開催するほか、学会誌や出版物の刊行が予定されています。

設立のイニチアチブをとったのは現会長の Bennett Zon 教授 (ダラム大学) で、後述する姉妹団体 CNCISI の創立にも携わってセンター長を務めるなど、19 世紀研究の国際的なネットワークの構築に励んでおられます。専門は長い 19 世紀における音楽文化と宗教、科学の関係で、*Evolution and Victorian Musical Culture* (Cambridge UP, 2017) をはじめ 4 冊の単著、数多くの編著があるほか、有力学術誌に論文が掲載されています。19 世紀音楽史の分野の第一人者として、ケンブリッジ大学から発行されている学術誌 *Nineteenth-Century Music Review*、Routledge 社の *Music in Nineteenth-Century*



INCSA 会長の Bennett Zon 氏

Britain シリーズを創刊、イェール大学やラウトレッジといった有力出版社の発行する学術誌の編集もされています。言葉や場所の違いを超え、これまで聞こえてこなかった声を共有することで 19 世紀研究を多様で開かれたものにしてゆこうとする姿勢が、学会の理念と響き合い、支えていると言ってよいでしょう。センターとも 10 年以上前にさかのぼることがで

きるご縁があります。2010年に開催された夏期国際シンポジウム“Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries”で報告され、また科研費新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の枠組みでは、第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」研究代表者の望月哲男現北海道大学名誉教授が主催された会議に基づく2012年刊行の論集 *India, Russia, China: Comparative Studies on Eurasian Culture and Society* (<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no11/contents.html>) に寄稿されています。

国際性と多様性を目指す INCSA はアジアの研究者との交流に非常に熱心で、現在日本からはスラブ・ユーラシア研究センター教員（安達）が学会運営と INCSA book series の編集に参画しています。また、センターはこの学会と連携する研究ネットワークである CNCSI (Centre for Nineteenth-Century Studies International) にも、ダラム大学を中心とする30以上の機関とともに加盟しており、アジア地域の研究者との交流のハブとなる役割を担っています。CNCSI についてはセンターニュース167号の記事 (<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/news/167/CNews167.pdf#page=5>) もご覧ください。[安達]

参考

INCSA 第1回大会報告募集 <https://in-csa.com/call-for-papers/>

INCSA ホームページ <https://in-csa.com/>

CNCSI ホームページ <https://cn-csi.com/>

井上紘一名誉教授がポーランド文化功労章を受章

センターのOBである井上紘一北海道大学名誉教授が、ポーランド政府より「文化功労章 グロリア・アルティス」金メダルを授与されました。おめでとうございます。このメダルは、文化分野におけるポーランド最高位の勲章に当たります。井上先生は、プロニスワフ・ピウスツキに関する多くの書籍・刊行物の著者であり、ピウスツキをテーマにした国際学会の共同主催者・参加者で、その功績が認められたものです。

2023年5月10日、憲法記念日（5月3日）に合わせて駐日ポーランド共和国大使館で開かれたパーティの席上、井上先生は、日本公式訪問中のズビグニェフ・ラウ・ポーランド共和国外務大臣ご臨席の下、パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使から、「文化功労章 グロリア・アルティス」金メダルを授けられました。なお、同じくプロニスワフ・ピウスツキ研究者である澤田和彦埼玉大学名誉教授（センター元共同研究員）も、ワルシャワ郊外のユゼフ・ピウスツキ博物館で4月26日にこのメダルを授与されています。

井上先生は1994年から2004年までセンターに教授として在籍し、センターにおける文化人類学研究・シベリア研究の発展に貢献されましたが、同時にプロニスワフ・ピウスツキ研究をライフワークとし、Pilsudskiana de Sapporo という資料集・論集シリーズを1999年に発刊されました。退職後も、『ピウスツキの仕事：白老における記念碑の除幕に寄せて：ポーランドのアイヌ研究者』（2013年）、『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌：二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта』（2018年）などの編著書を精力的に刊行されました。先生のますますのご活躍とご健康をお祈りいたします。[宇山]



井上紘一名誉教授



「文化功労章グロリア・アルティス」金メダル

アダム・ミツェビッチ大学（ポーランド）を訪問して

2023年7月16日から21日まで、ポーランド国ポズナニ市にある標記の大学を野町が訪問しました。これはEUの高等教育における人的交流を促進するERASMUS+というプログラムに基づく相互訪問で、同学のヤロスワフ・ヤンチャク教授（2017～18年の外国人研究員プログラム招へい者）とセンターの岩下研究員が中心になり進めていたものでした。ERASMUSとはEuropean Region Action Scheme for the Mobility of University Studentsの略ですが、16世紀のヨーロッパの人文学者デジデリウス・エラスムスの名前にも重ねてあります。現在はプログラム自体を拡大しEU外との交流を、学生のみならず、様々な職位や領域を対象として、積極的に進めています。センターとの交流はコロナ禍のため中断されていましたが、2023年5月に再開し、まず国際関係論を専門とするトマシュ・ブランカ教授をお迎えし、“Polar Power Play: The Race for the Arctic”という特別講義が行われました。今回の訪問では、同大の政治・ジャーナリズム学部が受け入れとなりました。筆者はスラブ・ユーラシア研究センターの昨今の活動を先方の研究者に紹介し、ウクライナ情勢に関わる共同研究の促進、交流領域の拡大、共同による外部研究資金などについても意見交換を行いました。[野町]



向かって左より、ヤンチャク教授、副学長オソフスキ教授、筆者、博士課程担当フィードラー教授（出典：Faculty of Political Science and Journalism, Adam Mickiewicz University in Poznań, Poland）

村上智見助教と博士課程院生のブレンさんが三島海雲記念財団学術研究奨励金を受贈

センター特任助教の村上智見さんと、スラブ・ユーラシア学研究室博士後期課程のブレン（布日額）さんが、三島海雲記念財団学術研究奨励金の2023年度（第61回）受贈者となり、7月7日に贈呈式が行われました。アジア地域の研究を対象とする人文科学部門の個人研究奨励金は、応募数83件のうち21件のみが採択されたものです。

村上さんは「古代ユーラシアにおける草原とオアシスの染織文化に関する研究」、ブレンさんは「東部蒙古における日露帝国軍部諜報活動の比較研究: 吉原四郎とバラノフを中心に」というテーマで研究を進める予定で、成果が期待されます。[編集部]



サマルカンド市郊外のカフィル・カラ遺跡を
発掘する村上さん



サンクトペテルブルグのロシア国立
図書館で文献調査するブレンさん

専任研究員セミナー

新年度となり、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

2023年6月22日 服部倫卓

報告：ロシア・ウクライナの穀物・肥料輸出の地経学

コメンテータ：井堂有子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

比較経済体制学会での自由論題報告を加筆・修正したこのペーパーは、2022年2月に始まったロシア・ウクライナ戦争とその後のロシアと欧米の対立関係を背景に、かつてなく安全保障と経済が絡み合っている状況について考察を行うものです。よく知られているエネルギーの問題に加え、今回の紛争でとりわけ大きな注目を集めたのがロシアとウクライナの穀物・肥料輸出であることを受け、その近年の状況が図表や地図を用いながらも解説されます。その後ロシアのウクライナ侵攻後の状況の変化について、プーチン政権のロシアは、単に穀物・肥料輸出で収益を上げるだけでなく、食料を通じてグローバルサウスの中でロシアに友好的な国を増やすとともに、国際的な制裁包囲網を乱そうとしていると指摘され、その

例として、ウクライナ産食料を世界市場に届けるために設置された輸送回廊「黒海穀物イニシアティブ」へのロシアの対応があがります。最後に、国際的なロシア包囲網がグローバルサウスにまで広がらない一つの要因として、一部の国々が食料面でロシアに依存している現実があるという仮説を提出して、その検証のために、ロシアの穀物輸出と、同諸国による国連総会での投票行動の相関関係を調べています。

コメンテータからは、緻密なデータに基づいた分析が評価されるとともに、投票行動の分析で用いられた親露指数の妥当性や、ロシア・ウクライナの穀物の品質の低さが、先進国向けには家畜の飼料用、途上国・新興国では食用にもなるといった供給市場の固定化につながっているという分析に対して、議論が提起されました。

出席者のあいだでも、投票行動の分析は大いに関心を惹き、また安全保障と経済の関係を分析するにあたって穀物・肥料に焦点を当てたことの意義が議論されました。そのほか、ポーランドやラトビアを例に EU 内でも今回の事態への対応で一枚岩ではないケースが見られるといったコメントがあったほか、トルコの立ち位置や制裁下でロシアが使用している輸出港を問う質問がありました。グローバル市場への適応と権威主義体制を両立させているように見えたロシアが、戦争の過程で経済の政治利用の姿勢を強めた姿を浮かび上がらせる有意義なセミナーとなりました。[安達]

2023年7月28日 岩下明裕

報告：①「ボーダースタディーズから読み解く国際関係」

②「ロシアとインド：対米バランスと中央ユーラシア協商」

コメンテータ：吉田修（広島大学）

ペーパー二本立ての豪華なセミナーとなりました。ペーパー①は、国際関係を分析する上での古典的なリアリズムと伝統的な地政学の双方に共通するアプローチとして、国際政治を大国間のパワーゲームとして「上から」眺める見方を指摘した上で、それを乗り越えるものとして、地域や当事者の観点から国際関係の実相を描くボーダースタディーズの技法を紹介するものです。第2次世界大戦後のハンガリー国境の推移、冷戦後の NATO / EU 拡大にかかわる経緯を重大局面ごとに整理して、それらが大国の影響を受けながらも、近隣諸国との関係性により規定されていたことを明らかにしています。地理を捨象することも、絶対視することもせず、その可変性とスケールジャンプを組み合わせることで分析の土台を考える地政治の手法を国際関係で確立する緊要性を訴えるものとなっています。

以上がミクロな地政治であったのに対し、ペーパー②は、2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻後、対露制裁に同調せず存在感を増しているインドの立場をマクロな視点で分析するものです。印露の友好にも見える関係の説明として、インドが対中関係においてロシアの協力を必須としているというのは表層的であるとして、米国への依存と中国及びパキスタンとの関係悪化という地政治の構造に注目します。インドにとってロシアは自立した対外路線を堅持し、安全保障を自らの手で確保するために不可欠なものであり、両者の関係は想像以上に非脆弱性を有するものかもしれないという結論が導かれています。

コメンテータからは、ペーパー①についてプラハの春に対するハンガリーの態度や、東側ブロック内でのルーマニアの独自路線など、小国の主体性を問う議論が提出されました。ペーパー②に対しては、インドの対米政策を考える上で、パキスタンへの抑止力として機能して

いた米軍がアフガニスタンから撤退したことへの不信感を考慮に入れる必要があるというコメントがなされました。

出席者のあいだでは、ペーパー①で国際関係における陣営形成の従来より有効な説明として採用されている、隣の席に影響されて飲み物が変わる「飲み会モデル」について議論が盛り上がり、地理的隣接性はグローバルな価値観の普及を考える上でどれほど有効なのかといった質問も出されました。ペーパー②に対しては、インド内部の地政治の多様性を問う質問があったほか、上海協力機構の来歴、構成国と機能について強い関心が示され、この地域にとっての安全保障の持つ意味が議論されました。二つのペーパーで報告者が示している新しい方法論をめぐって、リアリズムとコンストラクティヴィズムの区別、境界の空間性、地政治と旧来の地政治の違いなど、充実した議論がなされました。[安達]

研究会活動

センターニュース 168 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

- 5月26日 Survival Strategies Studies Seminar** Lucian Leustean (Aston University, Birmingham) “Religion, Violence and Forced Displacement in the Eastern Orthodox World”
- 5月29日 昼食懇談会：2023–2024 The 1st Bento Box Forum** Robert Greenberg (University of Auckland / SRC) “My Journey in Transdisciplinary Slavic Studies while Supporting the Humanities”
- 5月30日 SRC セミナー** Tomasz Brańka (Adam Mickiewicz University, Erasmus+ Institutional Coordinator) “Polar Power Play: The Race for the Arctic”
- 6月1日 Survival Strategies Studies Seminar** Olga Khomenko (Oxford University) “The Images of Ukraine and Japan in Ukrainian Press in Manchuria”
- 6月5日 SRC セミナー** Jim Hlavac (Monash University) “Diaspora Croatian in Contact with Other Languages”
- 6月8日 北海道スラブ研究会** 藤本健太朗 (SRC) 「ソ連の初期極東外交戦略～満州事変で変わったこと、変わらなかったこと～」
- 6月10日 International Seminar (東京)** 「ロシア・ウクライナ戦争：歴史の回帰 The Russo-Ukrainian War: The Return of History」 Serhii Plokhii (Harvard University, Ukrainian Research Institute / SRC), Olesya Khromeychuk (Ukrainian Institute London)
- 6月11日 JCBS イブニングセミナー** 池 炫周 直美 (北海道大学公共政策大学院) 「虹の向こう側：日本における LGBTQ の現状と課題」
- 6月15日 第163回日文研レクチャー** 「原子力と人間の傲慢：世界最悪の災害を再訪する (Nuclear Power and the Arrogance of Man: Revisiting the World’s Worst Nuclear Disasters)」 Serhii Plokhii (Harvard University, Ukrainian Research Institute / SRC)
- 6月16日 Survival Strategies Studies Seminar / SRC セミナー (東京)** Robert Greenberg (University of Auckland / SRC) “Language, Identity, and the War in Ukraine: The Balkan Connec-

tion”

6月16日 第45回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 長縄宣博 (SRC) 「長い20世紀のロシアと中東」

6月19日 SRC セミナー Alen Kalajdzija (Institut za jezik Univerziteta u Sarajevu) “Predstandardni jezički idiom bosanske alhamijado literature”

6月21日 Survival Strategies Studies Seminar / SRC セミナー Uilleam Blacker (UCL School of Slavonic and East European Studies (SSEES)) “Geopolitical curse or space of freedom? The Ukrainian steppe in the 19th century literary imagination”

6月28日 EES/UBRJ セミナー Mikhail A. Alexseev (San Diego State University) “War, Democracy, Society in Ukraine”

7月4日 SRC セミナー / ブックトーク Marie Favereau (Paris Nanterre University) “*The Horde: How the Mongols Changed the World*. Cambridge MA: Harvard University Press, 2021”

7月5日 SRC セミナー Robert Greenberg (University of Auckland / SRC) “Language, Identity and the War in Ukraine: Echoes of Balkan Ethnolinguistic Nationalism”

7月23日 Mingwei Song (宋明煒) 先生講演会 Mingwei Song (ウェルズリー大学) 「中国がSFを知ったところ——清末民初のSF小説とその後の展開」

7月30日 JCBS セミナー (SRC-EES 共催) 齊藤マサヨシ (写真家) 『『端っから始まる旅』の魅力語る』

8月8日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会 岡部克哉 (慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程) 「辛亥革命対応をめぐる日露提携の実情：六国借款団を例として」

8月10日 UBRJ/EES 実社会のための共創研究セミナー 田村慶子 (北九州市立大学名誉教授 / NPO 法人国境地域研究センター理事長) 「東南アジアとウクライナ戦争：中立を模索する ASEAN」、加藤美保子 (広島市立大学広島平和研究所) 「ウクライナ危機下のロシアと東南アジア：2014-2023」

人事の動き

諫早特任准教授の就任

2023年8月1日に、諫早庸一氏が特任准教授に就任しました。現在、センターでは概算要求に基づくプロジェクト「生存戦略研究」が進められていますが、その中でも文理共同研究は重要な位置を占めています。この問題は重要とはいえ、正面から取り組める研究者はセンターには少なく、特に田畑研究員の退任以降、その人材確保の困難さを感じていました。

採用となった諫早氏はモンゴル帝国史を専門としています。アラビア語、ペルシア語、漢文資料を駆使し、モンゴル帝国が広がる中華世界とイスラム世界の天文学について博士論文を執筆しました。現在はモンゴル帝国衰退の文脈で、14世紀の気候変動がもたらした危機について、歴史学を中心に据えつつも天文学、気象学、環境史など多様な領域の国内外のトップ研究者と連携し、多くの外部研究費を獲得しながらスケールの大きい共同研究を推進しています。業績の数・質も同世代の研究者の中でも際立っており、イスラム世界の天文学にお

いては既に世界で明確な立ち位置を築いておられます。また、大学教員として諫早氏はこれまでも十分な教育実績をお持ちで、学生からの評価も高いことが報告されています。これらのことを慎重に審査し、総合的に判断した結果、上記のプロジェクトを進めるのに不可欠な人材と確信し、准教授として採用に至りました。なおすべての審査が終わっていた2023年7月には、諫早氏が中心となって組織した国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから『14世紀の危機』を思考する」も大成功に終わりましたので、諫早氏のこれからのご活躍も大いに期待されるところです。プロジェクトに与えられる職位であるため、任期は令和9年3月までとなります。[野町]



辞令交付の後にて（左：野町センター長、右：諫早特任准教授）

研究員・事務職員の異動

亀田 望 事務補佐員 2023年6月1日（採用）

諫早 庸一 助教 2023年7月31日（退職）

諫早 庸一 特任准教授 2023年8月1日（採用）

札幌の思い出

ランコ・マタソビッチ

(ザグレブ大学／センター 2022 年度外国人招へい教員)

2022年6月30日の朝、長時間にわたる欧州からのフライトを経て私たちは東京に降り立ちました。妻と息子そして私自身、札幌での夏を楽しみにしており、そこで私はスラブ・ユーラシア研究センターに外国人研究員として迎えられたのですが、少し心配でもありました。まず隔離措置なく日本に入国できるか最後の瞬間まではっきりわからなかったのです。コロナ禍はまだ終わっておらず、ビザを支給するために日本大使館が求めるさまざまな公文書を揃えるのは一苦勞でした。さらに、私たちはクロアチアを発つ直前にコロナ検査を受けねばならず、また携帯電話に公的なファイル、許可証、招待状を全てダウンロードしなければなりません。そのため文書すべてをチェックし終わるまで入管で長時間待たされるのではないかと心配していたのです。しかし、東京羽田空港に降り立って間もなく入国を許可されました。パスポートと事前に携帯にアップロードしておいた文書を職員が簡単に確認して、それで終わりだったのです。よく知られた日本式の効率性を見るのはこれが初めてだったのですが、私たちは後々滞在期間を通して何かにつけこの能率のよさを目撃しました。札幌へのフライトの後、その日の午後にスラブ・ユーラシア研究センターでの受入教員である野町素己教授が私たちを出迎えてくださいました。

私の研究プロジェクトはスラブ諸語の標準形態の類型論に関するものでした。もしかしたら、この問題については札幌よりもザグレブで研究するほうが楽なのではないかと思われるかもしれませんが、実を言うとスラブ・ユーラシア研究センターでの滞在は計り知れないほど役に立ったのです。これはセンターの優れた図書室や私に与えられた研究室が広々として設備が整っていたからだけではありません。性能のよい研究設備があるのは素晴らしいことですが、北海道滞在を爽りあるものにしてくれたのは、ここで出会ったスラブ語学者たち、とりわけ複数のスラブ語の専門家であり、そのほとんどを話される野町教授との議論でした。自分の研究に関連する多様なテーマについて私は野町教授との会話から学ぶところが大きかったのですが、他の同僚からもまた私の研究についての意見をいただきました。例えばトマシュ・カムセラ教授（セント・アンドリューズ大学）はスラブ社会言語学の専門家、自身の研究プロジェクトで私と同じ時期に札幌に滞在していました。私はスラブ研究を広くカバーするスラブ・ユーラシア研究センターは特別な研究の場なのだ



クロアチア語の標準化について論じる筆者

たスラブ語学者たち、とりわけ複数のスラブ語の専門家であり、そのほとんどを話される野町教授との議論でした。自分の研究に関連する多様なテーマについて私は野町教授との会話から学ぶところが大きかったのですが、他の同僚からもまた私の研究についての意見をいただきました。例えばトマシュ・カムセラ教授（セント・アンドリューズ大学）はスラブ社会言語学の専門家、自身の研究プロジェクトで私と同じ時期に札幌に滞在していました。私はスラブ研究を広くカバーするスラブ・ユーラシア研究センターは特別な研究の場なのだ

とすぐに気づきました。これは、ただ一つのスラブ語文化、あるいはいくつかのスラブ語文化のみを研究するヨーロッパの大抵の大学とは大きく異なる点です。

スラブ・ユーラシア研究センターがある北海道大学のキャンパスは静かで自然も豊かで、また池もいくつかあり、私は気に入りました。時折、私は研究室の外に出て公園へ本を読みに行きました。木々、花、草に囲まれている方が、エアコン付きの部屋で四方を壁に囲まれるよりも集中しやすいことに気がついたのです。札幌は30度を越えることがなく、雨も滅多に降らないという、非常に快適な夏の気候に恵まれていることもその一因でした。私の国は遥かに暑いので、6月の昼に屋外で座って読書をするのは不可能なのです。尤も、同僚達には、キャンパスにカラスがたくさんいて、時々問題を起こすから気を付けろと言われました。しかしカラスから迷惑を被ることは結局ありませんでした。ひょっとすると、カラスたちは私の容姿が怖かったのかもしれない（別に、私がブサイクだというわけではありません。大抵の地元民とは違って、私は一人で公園のベンチに座る時マスクをしませんでした。だからカラスは私の顔を見て怯えたのかもしれない）。キャンパスの周辺もまた快適で、こぢんまりとしたレストランがいくつもありません。そこでは私の大好きな日本食が振る舞われていたのですが、中でも地元名物の「ザンギ」が特に気に入りました。家族と共に過ごした大学の宿舎は研究室から徒歩で40分の距離にありました。仕事が終わった後、私は宿舎までよく歩いて帰りました。そして遥かな藻岩山に太陽が沈む間、夕暮れの空に輝く色彩を楽しんだのです。

初めての国で外国人として過ごすことは常にちょっとした試練であり、グローバル化や英語の世界的普及にもかかわらず、言語の壁は未だ健在です。もちろん、私が研究を行っていたセンターでは皆上手な英語を話していましたが、札幌の街や北海道の中の地方となると話が変わります。私は何年も前に多少日本語を勉強したことがあり、息子は日本語を勉強中です。しかし、しばしば私は地元の人とうまくコミュニケーションをとることができませんでした。とはいえ、練習なくして学ぶことはできません。そこで、可能な時はいつでも、Google 翻訳に頼らず日本語を話してみることに決めたのです。笑ってしまう出来事もいくつかありました。ある日曜日、私たちは北海道中央バスに乗って札幌近郊の湖まで日帰り旅行をしました。ガイドさんが、私が札幌を気に入ったかとか幾つか質問をしたのですが、それに続いて、私に何かを尋ねました。私は「お昼は餃子を食いたいですか?」と聞かれているのだと思って、「ええ、餃子は好きですよ」と答えました。ガイドさんの質問を正しく理解していた息子はこれに吹き出しました。彼女が実際に言ったのは「日本語がとても上手ですね」だったのです。私は「上手(joozu)」と「餃子(gyooza)」を思い切り勘違いし、残りはあてずっぽうで考えていたのです。私が口にした僅か二言三言を聞いて私の日本語を褒めてくれるほど、そのガイドさんが親切だとは想像していませんでした。実際に人々と話さないで、本から外国語を学んでいると、こんなことが起こってしまいます……。この笑い話以外でも、私は会話を交わした日本人は非常に親切だったのだと、しばしば思いました¹。より直球で話すことが多い外国人としては、たとえ発話の文字通りの意味が分かったとしても、あるいは分かったと思った場合でも、相手が実際に何を言いたいのか理解するのは困難だったのです。

2ヶ月余りの札幌滞在中、週末を使って私たちは遠足に何回か行きました。白老のアイヌ博物館は特に記憶に残っています。博物館では実に素晴らしいアイヌ人とその文化について多くを学びました。比較言語学者である私は、アイヌ語の系統が未解明であることに戸惑い

ましたが、このことを考えるにつけ、未来の言語学者たちが解明するだろうと自分に言い聞かせました。大雪山国立公園で火山の頂上まで登ったことも忘れられません。坂に沿って開いている穴から硫黄ガスが一面に立ち込め、それはこの世のものとは思えない光景でした。ボートで巡った湖の中央に浮かぶ島に、ひっそりと建つ神社の素朴な美しさも忘れられません。まさにコロナ禍で日本を訪れることができ、私は幸運だったと思います。というのは、周りにはほとんど観光客がおらず、私たちは静寂の中で美しい景観や名所を心から楽しむことができたからです。ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂かマドリードのプラド美術館で長時間並ぶことに慣れた私のような人間にとって、北海道神宮のように高度に神秘的な場所を全く一人で歩けるといのは特権的なことでした。

私の歳になると（現在 55 歳です）、世界のまだ見ぬ土地に行ってみたくとはあまり思わなくなるもので、若いころのように新たな旅路を開拓することにワクワクしません。今はむしろ、昔に訪れた場所、滞在を楽しめた場所、ときに恋に落ちた所に戻りたいのです。札幌はきっとそうした土地の一つとなるでしょう。

（英語から三栖大明訳）



家族で北海道各地を巡りました

1（編集部注）マタソビッチ教授はこのように控えめに書かれていますが、入居時には管理人と日本語でやり取りをし、また受入教員にはヒッタイト語の歴史言語学的な意義について日本語で説明されました。

鮮やかに残る札幌での SRC 滞在を回想して

ロバート・グリーンバーク

(オークランド大学／センター 2023 年度外国人招へい教員)

SRC 滞在最終日、私は研究室の席に座りながらこの素晴らしい場所に最早なつかしさを感じていた。SRC が私に思索、調査、執筆をする時間、そして最も重要な、関心を共にする研究者たちとの交流の機会を与えてくれたことにとっても感謝している。特に野町先生とはスラブ諸語の歴史や構造について深く話をすることができ、楽しい時間を過ごした。野町先生と私とは、ボスニア語、クロアチア語、セルビア語 (Bosnian/Croatian/Serbian: BCS) を話すという習慣を長いこと共にしてきており、今回の 2 か月間の滞在中も多くの時間で BCS の会話を楽しんだ。今では、私の iPhone はもはや送信メッセージで非英語言語のテキストを自動修正しなくなった。これは明らかに、私たちのコミュニケーションが頻繁になされ、共同研究が新たなフェーズで進展し始めていることの証左だろう。私たちは、より最近のスラブの標準語または文章語の“language affirmation”の基準をテーマにした共同研究を推進しており、近い将来、学会や講義といった場でこの成果と一緒に発表できることを楽しみにしている。私たちは“language affirmation”という現象を説明する理論的な枠組みを提唱しており、この現象は、言語の制定者がその言語に国際的な承認を与えようと模索し、そして国際的な有識者や言語学者が彼らの著作中で当該言語の存在を肯定することでその肯定感に作用しているという、双方向の過程があるものと定義している。以上を踏まえ私たちは、まずマケドニア語とモンテネグロ語に焦点を当てていくことを目的としている。

特に東京出張は私の SRC 滞在の鮮やかなハイライトであった。熱心で聡明な若い学生たちに、バルカン半島とウクライナでの紛争に影響を与える言語イデオロギーについてプレゼンテーションするのはとても楽しかった。この特別な機会を用意してくださった東京大学の山崎信一先生に感謝を述べたい。学生からはたくさんの質問を受け、日本におけるスラブ研究の未来は明るいと感じたし、私の講演が多少とも彼らに洞察を与え社会言語学や学際的な研究に寄与したであろうという点に強い希望を見た。

私は過去 2010 年と 2016 年の 2 回、SRC を短期訪問しており、SRC が質の高い研究を行っていることを既に知っていた。その時以来の仲間たちと再びの交流をとっても楽しみ、彼らの研究についてより知



東京大学駒場キャンパスでの講義の様子

ることができた。安達先生や青島先生とは彼らの研究の新しい方向性について何回か意見交換を行ったし、何人かの博士課程学生の話聞く機会を持った。また、ロシア文学とポーランド文学に携わる文学研究院の小椋先生など、学内他部局の研究者とも交流した。私が会ったどの研究者も皆、学際的な研究に多大な意欲を持っていたことに気づいた。そして私自身の領域を超えた旅も、彼らのそうした意欲に共感してのものと思えるのだ。



センターでの講義のあとで
(左から野町研究員、筆者、安達研究員)

振り返ってみると、2008年以來、自身の研究活動と大学でリーダーシップをとるといふ重責を両立させてきたからだろうか、過去2回のSRC訪問は駆け足に感じられた。結果的に、私は短く圧縮された期間の制約のもと自身の学問的追求に専念せざるを得なかったのだ。このような期間とはたいてい、週末や休日、あるいは学会の締め切りに間に合わせなければならない、出版原稿の締め切りが迫っている、という強いプレッシャーがかかっているときである。それとは対照的に、今回の札幌での2か月間で私は自身の研究に浸ることができ、研究課題を有意義に前進させるための心の余裕ができた。外国人研究員プログラムで私は、いつものコンフォートゾーンの外側にある新たな研究課題——ウクライナにおける言語、アイデンティティ、戦争、そして1990年代にバルカン半島で起きた並行的な出来事が2014年以降のウクライナの紛争や戦争に及ぼす影響——を進展させることができた。ウクライナ研究の新参者として、当該分野の著名な研究者であるハーバード大学ウクライナ研究所所長のセルヒー・プロヒー教授とSRCの滞在時期が重なったことは嬉しかった。SRCでは、彼は5階の研究室のお隣さんである。昼食懇談会や私のSRCセミナーにおいてプロヒー教授からコメントをいただいたことを有難く思う。

滞在中は様々な場面で、幸運にもSRCの素晴らしいスタッフに支えていただいた。とりわけ中嶋さんには、私の滞在全般において職務以上に手厚い支援をしていただいた。また、問題が生じた際には田宮さん、IT関係で困ったときは山本さんにも支援と尽力をいただいた。私は花が咲き誇るキャンパスやアイヌ民族の展示も行っている附属植物園など札幌周辺の散策を楽しんだ。博物館のアイヌ民族に関する展示に触れ、アイヌ民族のこと、そして北大のアイヌ・先住民研究センターについてより知ることができた。当該センター長の加藤先生とこの分野での協力について前向きな話ができたとをうれしく思う。大学院生の間ではアイヌ・先住民研究への関心が高まり、新たなプログラムの展開・新たな研究への取組を見せていることを知った。北大と私の大学との間で連携がより強化され、近い将来SRCや他の部局の研究者がオークランド大学で研究発表をする機会があればと願っている。

日常生活では、近所の商店に通ったり市営施設の一角にあるピアノを弾く時間を見つけて出かけたりと、日本での生活に浸ることも楽しんだ。私が不慣れな日本語で話すと、人々は

笑顔になっているようだった。視覚障害者の一人として、私は慌ただしい場所で当初は気圧されてしまい言葉の壁に悩まされたが、札幌の人々は協力的で親切だった。人々は私に歩く方向を示してくれたし、時間があれば目的地まで一緒に行ってくれることもあった。おかげで私は覚えてたの日本語を試してみる機会になったし、彼らにとっては英語を話すチャンスにもなった。また、視覚障害者をとりまく日本の都市環境も印象的だった。ほとんどの歩道で点字ブロックがあり、それを頼りにすれば歩きやすい。すべてのエレベーターに音声ガイドがついているらしく、私はすぐに「ドアが開きます」、「5階です」という日本語を覚えた。地下鉄のホームでは転倒防止用の柵とゲートによって線路が仕切られている。ニューヨークの地下鉄に比べてなんと安全なことか！加えて、歩道は整然としており、自転車もたいていは走行ルールを守っている。歩道はそもそも歩行者のためにあるのだが、オークランドでは電動自転車や電動スクーターがしばしば歩行者の間を縫うように走行している。滞在が終わる頃には、日本の環境がとても安全で快適に感じられたために、オークランドのより困難な通りに戻るのが少し心配になるほどだ。そのほかアメリカやニュージーランドに比べて対照的だった点は、私のような車を持っていない人間にとって、日本の公共交通機関は高度に効率的で時刻表通りに運行していて親切だったということである。地下鉄は清潔で音声案内も頻繁にある。音楽好きの私としては、地下鉄車両が駅に入ってくる際のジングル(メロディ音)も楽しい仕掛けだ。札幌の周辺にも素晴らしい場所が広がっており、小樽や藻岩山といった場所でエクスカッションを楽しみ素敵な週末を過ごした。藻岩山へは路面電車、バス、ロープウェイ、そしてミニケーブルカーを乗り継いで行く。私のような乗り物好きには楽しい旅だったし、頂上の景色と新鮮な空気の感動は言うまでもないだろう。滞在最後の週末には、小椋先生たちが車で支笏湖と登別地獄谷に連れて行ってしてくれた。これらの景勝地を巡って素晴らしかったし、車内では始終ロシア語で会話し、日本におけるスラブ研究についてより詳しく知ることができたのも良かった。

ここでの滞在中私は、今この時代におけるスラブ研究の重要性を痛感した。私たちがウクライナでの戦争の恐怖を目撃している今、SRCがウクライナ研究を推進するよう努めていることや、ロシア研究に留まらないスラブ・ユーラシア研究を重視していることに敬意を表す。また、SRCでは生存戦略研究といった、私が考えるに革新的で世界を先導するプログラムなどの新たな共同体制や学際的な研究が行われていることも印象的だった。今、中嶋さんに自分の研究室の鍵をお返しするところなのだが、この時代における私たちの研究のあり方を思い起こさせ奮い立たせてくれたこの場所に深く感謝をしている。私の滞在中を思い出深く楽しいものにしてくれたすべての人に「ありがとうございます」を贈りたい。

(英語から田宮彩也香訳)

百瀬宏先生のご訪問

岩下 明裕 (センター)

2023年6月12日から3日間、百瀬宏先生と百瀬淳子ご夫妻が来札されました。2021年に先生から多額のご寄付をいただき基金を設立しましたが、ぜひ先生に一度、いまのセンターを見てもらえればという趣旨でご招待したものです。しかしながら、諸般の事情により、これまで何度か延期されていまして。「今日はやっと先生を札幌でお迎えできる」。私がセンター長のときのお約束が果たせる日がついに来たと気分も高揚しました。

百瀬宏先生は、知る人ぞ知る、日本におけるフィンランドを軸とした北歐史研究のパイオニアであり、国際関係学の学問的確立にも寄与されてこられました。先生の「小国」論は、ロシアのウクライナ侵攻や中国による専横的な振る舞いをみると、周りの国はこれにどのように向き合うべきか、いまなおリアリティをもって輝いています。大国中心でものを描こうとする俗流地政学の対極の位置に、先生の立論があり、これはセンターの地域研究の現在の視座にも引き継がれているといえます。その意味で、時機にかなった先生の訪問となりました。なお先生の経歴については、プロフィール(次ページ)をご覧ください。

新千歳空港に降り立った先生ご夫妻をまずお連れしたのが、先生がセンター在籍中に住まれていた真駒内の団地です。オリンピックのスケートリンク場のそばということで探したのですが、真駒内にはたくさんの団地があり、すぐにはわかりません。もう50年前のことですから、団地そのものがないのではと思いきや、「あけぼの団地」の名前のまま、先生ご夫妻が暮らされていた部屋を見つけました。



藻岩山にて

淳子夫人は先生が津田塾大学に移られて以来、初めての札幌ということだそうで、藻岩山やテレビ塔から見下ろす風景も含めて、ただその変貌ぶりに驚かれていました。ただ大倉山シャンツェだけはご記憶にあったようです。フィンランド語の通訳として、札幌オリンピックの代表団にアテンドしてジャンプを見たところを思い出されていました。そのあと、先生がおつきあいのあった教会にも足を運びました。

6月13日、寶金総長との面談後、先生ご夫妻はセンターの研究員や院生らへの懇談に臨まれました。現役の研究員以外に、望月哲男名誉教授、そして往年のセンターの蔵書構築を一身で支えてこられた秋月孝子さんも参加され、過去から現在までのセンターの時間の流れを共有する貴重な場が生まれました。何よりも、先生より年長の秋月さんによる「百瀬さんはまじめで本当に勉強ばかりしていたよね」というコメントは会場の笑いを誘い、だからこそ先生のご研究がここまで大きくなったのだと参加した一同、得心しました。

百瀬先生のご尽力により設立された百瀬基金は、フェロースhipや若手研究者育成に使わ

れていますが、フィンランド語を中心とした先生の蔵書をもとにセンターでは「百瀬文庫」として展示も行っています。端末などでの検索や貸し出しは行っていませんが、センターにお越しの際にはぜひ先生のご著書や論文、ノートなどとともにその蔵書をご覧になることで、先生のこれまでのご研究の意義を共有いただければと思います。

センターの礎をつくってくださった百瀬宏先生と基金設立にご尽力くださった淳子夫人には改めてこの場でお礼を申し上げるとともに、先生の研究スピリットをセンターは末永く大事にできればと願っています。



先生との懇談会

【百瀬宏先生のプロフィール】

百瀬 宏（ももせ ひろし、1932 年 3 月 1 日～）は、日本の政治学者で、津田塾大学名誉教授、広島市立大学名誉教授。専攻は、国際関係学、国際関係史、フィンランド近現代史。

東京都生まれ。東京大学教養学部教養学科卒業。東京大学大学院修了後、東京大学教養学部助手、北海道大学法学部助教授・教授、津田塾大学学芸学部教授、広島市立大学国際学部教授を歴任し 2005 年 3 月定年退職。この間フィンランドのオウル大学、ヘルシンキ大学などで講義を行った。北海道大学での在職は 1964～1973 年の期間。この間に、1969 年 4 月から 2 年間、法学部附属スラブ研究施設（スラブ・ユーラシア研究センターの前身）の施設長を務めた。当時はまだ法学部の附属施設であったスラブ研究施設を、学内の独立した部局とすべく尽力された。



百瀬文庫にて

元 CHIR(国際関係史学会)日本代表理事。日本国際政治学会名誉理事。北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター名誉研究員。北欧文化協会名誉会員。2007 年 5 月、フィンランド共和国よりフィンランド白薔薇勲章騎士一級章を受勲。2020 年 10 月にスラブ・ユーラシ

ア研究センターへ多額の奨学寄附金を寄附いただき、ポスドク等の若手研究者の研究を助成する百瀬フェローシップが創設された。また、寄贈された蔵書も、「百瀬文庫」としてセンター内で展示されている。

【百瀬宏先生のメッセージ】

(2023年6月13日 スラブ・ユーラシア研究センター大会議室)

この度はお招きを頂き、誠に有難うございます。

北海道大学には、今日言われるところの「スラブ・ユーラシア地域」の研究を志した頃から、専任の研究・教育者として育てていただきました大恩があります。今私が、スラ研のお役にたつことがあるとしますと、これまでのスラ研のご活動の一端に携わったことのある自分として、記憶する限りのことを、心置きなくお話しすることで、皆様のご好意にお応えできましたら幸いです。

それで、たいへん昔のことになりますが、私が東京大学教養学部の国際関係論というところの助手を務めていました頃に、北大法学部の矢田俊隆先生から、法学部に来ないか、というお誘いが、かかってきました。どういうお誘いかと言いますと、法学部の国際政治の助教授および同学部付属のスラブ研究施設の専任研究員として赴任、というものでした。恩師で、また当時スラ研の兼任研究員でもあった江口朴郎先生と相談をして、お受けしました。1964年のことです。

その頃のスラ研の施設長は鳥山成人先生でした。鳥山先生は、東大の西洋史学科のご出身でしたが、実に博識な方で、どういう学問分野にも精通しておられ、それがまたスラ研の施設長としての八面六臂の活動を支えていたという印象を、私は持っております。大先覚のことを勝手に回顧させていただきますが、先生は研究所の公的な会合の場で、座長としての発言の場では控え目で、皆の発言をよく聞き、整理して、会合を意味あるものにまとめていくことに卓越しておられました。反面、くだけた場になると、それは、それは、舌鋒鋭い寸評をされるのです。調子に乗っている発言者が、引っ込みがつかないような場面がよくありました。私などは、そんな真似は転んでも出来ず、ただただ見ているだけでした。どうも話が脱線してしまった感じですが、私が申したいのは、スラ研が発展を遂げるのには、並大抵でない努力が陰であったということです。

そのうち、鳥山先生が、本来身を置いておられた文学部のほうから強い要望があり、先生はそちらに戻れることになりました。後任施設長は、年齢的に百瀬ということになりました。赴任間もない私を援けてくださったのは、スラ研の教職員の方がたでした。お名前をあげますと、山本敏、外川継男、出かず子、木村汎といった教員の方がたであり、図書職員の秋月孝子氏でした。秋月さんは、図書業務の司書が本業で、スラ研の使命ともいえる専門関係の図書の購入、整理に携わっておられ、スラ研の命とも言うべき資料文献を守って下さっていました。

スラ研では、他にも事務や図書業務を扱う事務職員の方がたがおられましたが、どの方もわれわれ研究教育者たちが、緊張のうちにも安心して業務に携われるような環境を守って下さっていました。

ここからは、いろいろな思い出話に移りますが、私がスラ研に就職してまもなく、1966年から2年間、フィンランドに留学させていただきました。日本とフィンランドの間には、

それまで学术交流の制度がなく、1966年になって、ようやく両国間に学术交流協定が結ばれて、私はその第一号となったのです。

フィンランドの外交史料館や大学の図書館といった施設で文献を調べに行きましたが、当時は外国人に利用がすべては認められておらず、限られた史料の中で立ちあげたのが、私が初めて世に問うた学術書の『東・北欧外交史序説—ソ連・フィンランド関係の研究—』（福村出版 1970年）です。そういうわけで、この本では、その後になって、フィンランドを初め関係諸国の史料がぞくぞくと公開されるようになった時代の史料は、もちろん利用されてはおりませんが、あの頃にフィンランドを訪れた外国人の歴史研究者が参照し得たかぎりの史料・文献を用いて、自分の第一冊となった学術書を書き上げることができたのです。

この「東・北欧」の名称には、私なりの思いがこもっております。それは私にとっては、単に「ヨーロッパの東北部」という単純な地理的位置を示すだけの名称ではありません。私の言う「東・北欧」とは、そこに含まれている国々（さしあたってはフィンランドとスウェーデン）を、「東欧」諸国が直面している対外的困難を共有しているという私の問題意識に基づいている、私自身の造語である、という認識を読者に示したい意図に発するものでした。

さて、スラ研の思い出として、もう一声上げたいことがあるのですが、それは、北大の学生たちのことです。あの頃からスラ研は、学生向けの講座を設けており、私自身は法学部で国際政治関係の講義もしておりました。それと絡む思い出話はいろいろありますが、忘れられないのは、大学封鎖の事態が起きた時の記憶です。スラ研が同居していた法学部の建物も封鎖にあい、もちろん私の講義をしていた教室も、転々と他の建物に移動しなければならない事態でした。それでも学生たちは、私の講義にひるまず出席してくれていました。そうこうして、やがて、警官隊が導入されて、大学の建物すべての封鎖が解除された直後のことです。自分の研究室に戻った私の目に真っ先に入ったのは、本棚です。二つの本棚は内向きにあわさって中が見えないようにしてあり、張り紙が張ってありました。そこに書きつけられていたのは「触れるな！ 触れた者は死刑！」という文言でした。そこに寝泊まりしていた学生が書いたのです。私は胸がジーンとしました。

こんな昔話ですが、久しぶりのスラ研で、思い出話をさせて頂きました。お招き頂いた御礼に、スラ研に対する思いをお話しさせて頂いた次第です。どうも有難うございました。

3年ぶりにポーランドを訪問して

野町 素己（センター）

昨年4月にセンター長に就任して以来、不本意ではあるが、学問的なことから遠ざかるばかりで、ややもすれば自分が研究者であることを忘れそうである。毎日ありとあらゆる書類作成や膨大な量のEメールが待ち受け、学内外の会議が留まることなく予定され、日々圧倒される。同僚に力強く支えられていることは自覚し感謝しているが、私も40代後半に入り目に見えて体力と集中力が低下し、役職の責務を期待通りに果たせているとは思えない。不甲斐ないがセンター長には向いていない、ただそれだけである。

そのような状況にあって、ときおり自分が研究者であったことを思い出させてくれるのが共同研究や研究会への招待である。全く新しいテーマだと準備が心許なくなるが、これまで取り組んだテーマが生かせそうな場合には前向きになれる。2023年6月6日ワルシャワ開催の国際シンポジウム『スラブ言語学における新旧展開にみるズジスワフ・シュティベルの遺産』に招待されたことは、その一つである。今年はシュティベルの生誕120年に該当し、ワルシャワ学術協会主催で、ポーランド学士院スラブ学研究所など4学術機関の共催でこのシンポジウムが組織された。

ズジスワフ・シュティベル（1903-1980）は20世紀のポーランドを代表するスラブ語学者で、特に大変優れた方言学者として記憶されている。ポーランドでまだ若手文法学的なアプローチが主流であった1930年代末から、シュティベルはプラハ言語学サークルに代表される構造主義を研究枠組みに導入し、現代的な言語分析理論に根差したポーランド語研究を行った。そして従来理論面が弱い、言語記述の域を出なかった方言研究に構造言語学的アプローチを応用したことも特筆に値する。

シュティベルの研究領域と業績は多岐にわたるが、彼の構造言語学的アプローチの実績の例として、ポーランド北部ポモージェ地方で行われるカシュブ方言研究が挙げられる。カシュブ北部諸方言には1950年まで母音の長短及び上昇・下降アクセントの存在が認められること、それゆえスラブ諸語の中でも当該方言は古い特質を保っている、いわばエキゾチックな存在であると根強く信じられていた。例えば、ロマン・ヤコブソンの名著『スラブ諸語との比較におけるロシア語の音韻進化に関する考察』（1929）でも従来の立場が支持され（先行研究に沿っただけなのである意味当然ではある）、後のヤコブソンの著作『スラブ諸語概説』（1955）においても意見は変わっていない。しかし、シュティベルは他の研究者が集めた膨大なカシュブ方言テキスト、歴史的資料、そして本人が現地で集めた方言資料を音韻論的に分析し、現代のカシュブ方言には上記の特性が残っておらず、遅くとも19



ズジスワフ・シュティベル
（出典：ウッチ学術協会の
ウェブサイトより）

世紀末には失われていたことを 1951～1954 年までの諸論文で証明した。これは言語理論家と実践的方言学者の両面が備わっていたシュティベルだからこそ可能であった。

このシンポジウムの組織者はポーランド方言研究で主導的な役割をしているドロタ・レンビシェフスカ先生と 20-21 世紀で最も重要なスラブ方言学者ヤヌシュ・シャトコフスキ先生である。シンポジウムでは 4 セッションで 14 本の報告があり、シュティベルの研究概観、ウクライナ方言研究、スロバキア方言研究、カシュブ方言研究、辺境における言語接触など、シュティベルの功績に沿う内容であり、またシュティベル後の研究の展開を示すものであった。なお私以外は、ポーランド、ウクライナ、ドイツ、スロバキア、チェコからの参加者であった¹。

私はシンポジウム組織者から「シュティベルのカシュブ方言研究の概観と再評価」というテーマで発表して欲しいと事前に言われた。これまで数多くシュティベルを引用してきた私としては、これは比較的簡単なテーマだろうと思って引き受けたが、これまで一見簡単と思って実際に簡単だったことはあまりない。毎回引き受けて暫くたってからうろたえる自分の浅はかさを恥じるばかりだが、今回も例外にはならなかった。というのも、シュティベルの業績はこれまで同僚や直弟子の優れた研究者によって何度も（再）評価されているからで、事実シュティベルに関する複数の論文集や研究書が刊行されている。私がわざわざワルシャワまで出向いて、他人が書いたものを読めばわかることを繰り返すのは、いかにも無意味である。従って、シュティベルの業績の内容や意義を述べるだけではなく、それが当時いかに先駆的だったのか、また当時のスラブ語研究の発展にどのような影響を持ったか、ということと同時代人のスラブ語研究者の評価から読み取り、また未刊行アーカイブ資料などの分析を通じて検証することにした。

なお、シュティベルは、1968 年にコロンビア大学のウクライナ語学者ジョージ・シェベロフによって、コロンビア大学に招かれている。当時シュティベルの講義を聴講していた学生が、現在も講義ノートを保管していて、この機会にその内容を参照することができたのは興味深い経験であった²。しかし先行研究との重なりは、ある程度は避けられなかった。それに無論、何らかの大発見を盛り込めたわけでもない。が、多少でも新しい知見が見いだせたら、それでよしとせざるを得ない。

それでも今回は何としてもワルシャワに行きたい理由がいくつかあった。まず、昨年 12 月に懇意にしていたハンナ・ポポフスカ＝タボルスカ先生が他界されたので、その墓参をいち早くしたいと考えていたからである。この方はシュティベルの指導を受けてカシュブ

1 当日のプログラムは次を参照されたい。 <https://ispan.waw.pl/default/zaproszenie-na-konferencje-w-120-rocznice-urodzin-zdzislawy-stieberta-6-czerwca-2023-r/>

2 この当時の学生とは、シェベロフの下で博士号を取得したテレサ・アルト氏のことである。アルト氏はコーネル大学で教鞭を取る著名なスラブ学者ウェイルズ・ブラウン先生の夫人である。ポポフスカ＝タボルスカ先生とシュティベルの文通の一部がレンビシェフスカ編『ズジスワフ・シュティベル（1903-1980）：資料と回想』（2013）に刊行されており、シュティベルは手紙の中で「ここには頑張ってなかなかの英語を話すテレサという人がいて（もちろん「英語」はアメリカ英語を意味している）、困難があると、彼女はアメリカ英語からイギリス英語に翻訳してくれる」と書いていた。名前が一致することからアルト氏に伺ったところ、ご本人と確定できた。

研究に入り、カシュブ諸方言、ソルブ諸方言、語源学などで重要な業績を数多く残された。私が初めてポポフスカ＝タボルスカ先生と連絡を取ったのは2006年で、それ以来ワルシャワに行くと先生のお宅に必ず招かれ、カシュブ研究の話だけではなく、当時の方言調査の様子、思い出、現代のスラブ語研究の潮流についてお話しくださり、また自分の論文の研究指導を受けるような贅沢な機会を何度も得た。合わせて先生の論文抜刷や著作も数多く頂戴した。また、アダム・ミツキェビッチ著『パン・タデウシュ』のカシュブ訳が刊行されたときには、*Acta Slavica Iaponica* にその短評も書いてくださった³。いつからか、厳しくも温かい先生にお目にかかること自体が楽しみになっていた。

ポポフスカ＝タボルスカ先生との交流で特に印象に残るのは、2016年ウクライナのリビウで行われた ASEES 夏季学会からの帰途である。私の帰国便が午後ワルシャワ発だったのだが、どうにもリビウから飛行機の接続が悪く、リビウから深夜バスでワルシャワに向かうことになった。この旅程は先生に事前に伝えてあったのだが、深夜バスの中でメールを開くと、飛行機に間に合うからワルシャワの空港に行く前に先生のお宅に寄るとのご提案があった。朝9時過ぎにポポフスカ＝タボルスカ先生のお宅にお邪魔すると、ご夫婦で満面の笑みでお迎えくださり、客間に入ると豪華な朝食が準備されていて「深夜バスだと朝ごはん食べられなかったでしょう？ 長い旅路につく前に栄養取らないといけませんね」とおっしゃり、深夜バスでの疲労が吹き飛んだのが昨日のこのように思い出される。

話が逸れてしまったが、シンポジウム自体はシュティベルを記念するものではあるが、シュティベルがポポフスカ＝タボルスカ先生らをかシュブ学者として育成し、それによりカシュブ研究が著しく発展したことも、シュティベルの重要な貢献であり、今回の報告では、これに加えてシュティベルの直弟子研究者にいかなる影響関係があったかも話したいと考えていた。しかし学内点検評価、センターの拠点評価の書類準備、学外の会議への出席、日本の生活になかなか慣れない外国人研究員のお世話などが学会直前に一気集中し、また日頃のストレスからか左耳が強く痛み、いつかほとんど左耳が聞こえなくなってしまった。医者からは長時間のフライトを伴う旅行は避けるようにと言われたため、ワルシャワ訪問を断念し、報告自体はオンラインで行うことになった。

今日、カシュブ語はポーランドにおいて「地域言語」という法的なステータスを持ち、20世紀中ごろから社会言語学も大いに発展し、さらにポーランドが多言語政策を支持する(西)ヨーロッパの一員となり、共産主義時代の言語イデオロギーも過去のものとなったため、



左からロマン・タボルスキ教授(夫君)、ハンナ・ポポフスカ＝タボルスカ先生、筆者(2018年)

3 *Acta Slavica Iaponica* の第33号に掲載されている。 <https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/acta/33/a33-contents.html>

100年以上続いた「カシュブ諸方言はポーランド語と異なる独立した一言語かそれともポーランド語の方言か」という議論はもうあまり聞かれぬ。シュティベルは共産主義時代の学者であったから、そもそもカシュブ語が独立した言語という議論自体が不可能ではあったが、彼はそれが理由で「カシュブ諸方言をポーランド語の方言」と扱っていたわけではない。シュティベルの研究グループは、1950年代に『カシュブおよび隣接方言の言語地図』のための大規模な方言調査を行い、ポーランド諸方言を通時的・共時的側面から総合的に比較研究した。結果、ポーランド諸方言とカシュブ諸方言の歴史的発展パターンは多くにおいて類似、ときに同一であることを示してみせた。

現在見られる両方言群の差異に関しても、歴史的なポーランド諸方言に今日のカシュブ諸方言と同一の現象が見られたり、あるいはその逆もあつたりするといった、カシュブ語がむしろポーランド語に連続する方言群に加えられることをシュティベルは証明したのであり、これが彼の大きな功績の一つである。学術的な事実を必ずしも理解しない感情優先型の言語活動家などからすると（それはそれで社会言語学的な研究対象だが）、これはあまり歓迎されない「功績」でもある。言語学とは異なり、日常生活で使われる「方言」という響きは「劣ったもの」というニュアンスも持ちうるので、「歴史的に見てカシュブ諸方言はむしろポーランド語と連続する方言群と位置付けたことがシュティベルの業績である」とだけ言うのは、やや具合が悪い。その一方で、シュティベルが「書き言葉」としてのカシュブ語にいかなる見解を持っていたのか、とりわけ彼の存命中の1976年に刊行された『カシュブ書記法の原則』、またカシュブ文学作品などをどのように見ていたのかということが気になった。今となるとポポフスカ＝タボルスカ先生にこのことを伺わなかったのが悔やまれるが、存命のシュティベルの直弟子たちなら何かご存じかもしれない。そういった方々は概ね90歳前後で、メールも使わない方もおられるから、いち早くポーランドに行ってお話をお伺いしたいと思っていた。

それが実現したのが今年7月のボズナニ市のアダム・ミツキェビッチ大学への派遣である。もともとは仙石研究員が派遣されるはずで、主に社会科学の共同研究についての打合せを目的としたものであった。ERASMUS+ 予算の都合上7月末までに訪問を終える必要があるとのことで、だいぶ急な出張となったがとりあえずボズナニでの業務を終え、その後にシュティベルのお弟子さんたちを訪ね、本や論文に書かれていないシュティベルのことを伺い、また可能であれば当時の資料などを見せていただけたらと願いながら、ワルシャワに向かった。

ポポフスカ＝タボルスカ先生以外で最もシュティベルに近く、カシュブ方言調査も行ってた当時の教え子ヤヌシュ・シャトコフスキ先生とヤドビガ・ジェニュコバ先生が、幸いにも貴重な時間を割いてくださった⁴。お二人とも私の質問の意図をよく理解してくださったが、大変残念ながら、カシュブ書記法やカシュブ文学作品についてのシュティベルの見解がわかるものは全く存在せず、またシュティベルとの個人的な会話などを思い出しても、以上のことは全くご存じではないことが分かった。なお、上述『カシュブ書記法の原則』の著者で、シュティベルとは無関係に、カシュブ人として言語研究に取り組んだグダンスク大学のイエ

4 なおシュティベルの弟子として最も著名なのは、おそらくマケドニア学士院会員のズザンナ・トボリンスカ先生である。トボリンスカ先生にこの件に関して伺いたしたが、新しい情報は得られなかった。

ジ・トレデル先生やエドワード・ブレザ先生は既に亡くなっていたため、ご遺族にシュティベルとの文通の有無を聞いたが、そういったものは全く見当たらないとのことであった。シュティベルの業績一覧から判断するに、1970年代に入るとほとんどカシュブ研究は行っておらず、また社会言語学に関心を持っていた可能性自体が低い。従って、このテーマの探索は終わりとなった。



左から筆者、ジェニユコバ先生、フシチャ先生（2023年）

帰国の前日の午後、ポポフスカ＝タボルスカ先生のお墓参りを終え一息ついていると上記のレンビシェフスカ先生からご連絡があり、シャトコフスキ先生と一緒に同日夕方にポポフスカ＝タボルスカ先生のご主人で、著名なポーランド文学研究者のロマン・タボルスキ先生を訪問することになった。タボルスキ先生は私を見ると大変喜ばれ、また墓参したことを告げると感謝された。これまで何回もお邪魔し、楽しい時間を過ごしたポポフスカ＝タボルスカ先生のお宅で、先生のお姿がないことに違和感と寂しさを覚えつつも、これまで本当に貴重な時間を過ごしてきたことを再認識した。

レンビシェフスカ先生は、ポポフスカ＝タボルスカ先生の夫君からスラブ学者との文通類を受け取る約束をしていたらしく、歴史的な価値があるそれらの資料が散逸しないように、ポーランド学士院の文書館で保管するとのことである。レンビシェフスカ先生が手紙箱を開けると、そこには文通した研究者の名前がアルファベット順に丁寧に整理されていた。「私の妻はなんでも全部整理してから旅立ったのだよ」と夫君が仰る⁵。封筒に丁寧に書かれた名前を覗くと、ルベン・アバネソフ (Awanesow) に始まり、サムイル・ベルンシュテイン (Bernsztejn) が続く……。名だたるスラブ語研究者との様々な交流を示すこれらの資料から、スラブ語研究史に新たな光が当てられる日が来るかもしれない。

整理された手紙をアルファベット順に追っていったレンビシェフスカ先生がアルファベットのNにたどり着いたとき、「素己さん、見てごらんなさい」と興奮気味におっしゃった。何事かと覗き込むと Motoki Nomachi と書かれた封筒の中に、私がこれまで送った手紙が整理されて入っていたのである。間違いだらけのポーランド語の手紙は恐ろしくて見る気がせず、もはや何を書いたかすらも覚えていない。学士院の文書館に保存されて誰かの目に触れると思うと冷汗が出る。レンビシェフスカ先生は、ポポフスカ＝タボルスカ先生の足跡をたどる論文を執筆予定とのことである。もし万が一私の手紙に言及することになったら、意味が変わらない範囲でポーランド語の文法や語彙を直すようお願いしたが、これは資料の改ざんにあたるだろう。一抹の不安を覚えつつも、翌日にはそれも忘れて、仕事が溜まりに溜まった札幌への帰途に就いた。

5 これはまさにその通りで、ポポフスカ＝タボルスカ先生の最後の著作は『時折書きしたためたもの』（2022）と題される回想録であった。

イリヤ・カバコフ追悼

生熊 源一

(日本学術振興会特別研究員 PD / 早稲田大学)

5月29日、ニューヨークにてイリヤ・カバコフ(1933-2023)が没した。ちょうど90歳になる年だった。ウクライナのドニプロペトロフスク(現ドニプロ)に生まれ、青年期以降はモスクワで自らの芸術を開花させ、亡命してからは世界的なアーティストとして認知されるに至った彼の旅が終わりを告げた。後期ソ連の非公式芸術を専門とする人間として、いくつかの作品に触れながらカバコフという人物の残した足跡を振り返ってみたい。

よく知られているように、カバコフはモスクワ芸術大学のグラフィック学部で学び、ソ連時代は絵本の挿絵画家として生計を立てていた。彼が卒業したのは1957年のことだが、在学中からエリク・ブラートフやオレグ・ヴァシーリエフと交友関係を結び、1962年にはエストニア人の親友ユロ・ソオステルを介して多種多様な非公式の芸術家たちと出会う。60年代から70年代にかけてのこうしたネットワークについては、『イリヤ・カバコフ自伝』(鴻英良訳、みすず書房)で詳しく語られている。

交流の輪の中心人物のひとりであったカバコフは、次なる世代に決定的な影響を及ぼした。とりわけ1970年代以降のモスクワ・コンセプチュアリズムについては、カバコフへの言及抜きには語りえない。「集団行為」(1976-)の中心人物であるアンドレイ・モナストウイルスキーは、自身がしばしばコンセプチュアリズムの父と呼ばれることについて聞かれ、それは自分ではなくカバコフのことだと述べているほどだ¹。とはいえカバコフのみが父であったのではなく、二人の父、あるいは祖父としてのカバコフと父としてのモナストウイルスキーがいたと言った方が実態に近いだろう。

カバコフ世代のコンセプチュアリストであるヴィクトル・ピヴォヴァロフが描いた《70年代・80年代のモスクワ非公式芸術の身体》(2002)(以下サイトで閲覧可能。上から9点目。10 хрестоматийных работ Виктора Пивоварова [<https://arzamas.academy/materials/2024>](2023/8/3 閲覧))は、そのことを図示したかのような作品だ。ここではひとつの身体の各部位にコンセプチュアリストの名前が刻み込まれており、カバコフの名前は右脳、そして集団行為(КД)は頭頂葉のあたりを指し示している。片方は亡命しもう片方はロシアに残り続けたが、両者の交感こそがコンセプチュアリズムの輪郭を形作ってきたのであり、彼らはまさしくこの共同体の中核であった。

コンセプチュアリズムという共同的な身体を成立させていたのが、言葉であったことは言うまでもない。カバコフ自身のインスタレーションに絡めて言えば、《NOMAあるいはモスクワ・コンセプチュアル・サークル》(1993)はまさにこの状況を体現する空間を作り上げていた。これは円形の空間を区切って病室のような半個室を作り、それらを繋ぐ中央のスペースに複数の台座を設置したものだ。全10室はそれぞれモナストウイルスキーやグロイ

1 Ольга Мамаева. Андрей Монастырский: «И время сейчас совсем другое» [<https://www.colta.ru/articles/art/5173-andrey-monastyrskiy-i-vremya-seychas-sovsem-drugoe>] (2023/08/02 閲覧)

スといったコンセプトアリズムの関係者に割り当てられており、部屋の壁には各人のテキストやドローイングが掲げられている。中央の台座は、このサークルの中で流通していた「コロボク」「不在」「空虚な行為」といった用語に捧げられていた。ここでは個々の自己記述が共同の概念として結晶化していく様を見てとることが出来るが、実は「ノマ」という名称それ自体が分割と統合の原理を指し示すものでもあった。というのもこれは、バラバラになってエジプト各地に散らばった後に拾い集められたオシリス神の遺体に着想を得たネーミングだったからだ。

この空間にカバコフの部屋はない。しかし当然ながら、だからといってカバコフの重要性が薄れるわけではない。中央の台座において「不在」が示されるように、ここではむしろ不在の中心としてのカバコフの姿が見え隠れすると言った方が正確だろう。モナストウイルスキーは、誰よりも深くこのことを理解していたように思われる。インスタレーションのための3種類の素材を提供してほしいと依頼されたモナストウイルスキーは、各種の資料を貼り合わせ、巨大なノートの形でカバコフへと届けた。カバコフはインスタレーションのために、ノートからそれぞれの素材を切り取らなくてはならなかった。何より重要なのは、それぞれのページの4分の1が余白であったことだろう。カバコフが余白を切り落とす。この行為こそがモナストウイルスキーの狙うところであり、一連のプロセスは「集団行為」のアクションのひとつとして記録された。モスクワを後にしたカバコフに向けられた、余白のラブレター。カバコフの場所は確かにそこにあった。

今更言うまでもなく、カバコフの創作はこうした余白をめぐる展開されてきた。より正確には、余白とゴミをめぐる。カバコフは「ゴミとは、次の瞬間には視界から、そしてそもそも私たちの配慮の地平から消失してしまうもの」²であり、死を形象化したものなのだと語っている。視界の外へ、余白へと消えてしまうものに対する関心は、明らかに死者の幻視と結びついている。彼らは小さな「白い人々」としてカバコフ作品にしばしば登場しているが、描く者がいずれその領域へと踏み込みかねないと示唆してきたのもまたカバコフだった。スタジオ近くの病院で亡くなったというカバコフは、《自分の絵のなかに飛び込んだ男》のように、自らの作品の余白へと溶け込んでいったのだろう。

ゴミであれ声であれ、カバコフはかつて生きていた人たちが残したものを拾い集めてきた。新潟県十日町市にある越後妻有里山現代美術館では、カバコフ



《16本のロープ》

の代表作のひとつである《16本のロープ》(1984/2021)を鑑賞することができる。部屋を横切って張られたロープにはハサミや紙くずなどが吊るされ、それぞれの物体には生活の

2 沼野充義(編著)『イリヤ・カバコフの芸術』五柳書院、1999年、199頁。

中で発せられた無数の声を記した小さなプレートが付けられている。すべてのものを保存しようとする、きわめてコスミズム的なインスタレーションだ。カバコフの意図を汲むならば、保存されたものと向き合いある種の復活を遂げさせることこそが、残された私たちの使命となるはずだ。

かつてモナストウイルスキーの部屋を訪ねた時、ニューヨークにいるカバコフからの電話が鳴り響いたことをよく覚えている。二人の会話は短く終わったが、かねてから注目していた両者の結びつきを体感することができて嬉しく思ったものだ。電話はもう鳴らず、コンセプトアリズムの共同身体には余白が増えていく。カバコフのアルバム作品に登場するコメントータのように、残されたものについて語り伝えることしか私たちにはできないが、ある意味でそれはカバコフ自身が行ってきた営みとよく似ている。かつて親友であるソオステルがあまりに早く天逝した際に、カバコフが行ったのもソオステル論を執筆することだった。私たちは今後、カバコフの声を幾度となく呼び戻すだろうし、そうでなくてはならない。不在の中心としてのカバコフは、これからも私たちの営みのうちに生き続けていくに違いない。しかしひとまずは別れを告げよう。さようならカバコフ、どうか安らかに。

浦雅春先生を悼む

安達 大輔（センター）

浦雅春先生が7月19日に逝去された。私は先生の指導学生でもなく、後で述べるように追悼文を書くにふさわしい方はほかにたくさんいらっしゃるのだが、東京大学の駒場キャンパスで教鞭をとられていた時期の先生にロシア文学・文化研究者としての姿勢を学んだように感じており、あくまで個人的な追悼というかたちで、非礼を顧みずこの文章を記させていただく。

先生と最初にきちんとお話ししたのは、桑野隆先生と3人でだったように記憶している。当時19世紀ロシアの文学サロンをテーマに卒業論文に取り組んでいた私は、ブルデューやルーマンらにすっかり感化され、評価の定まった特定の古典をネチネチマチマといつまでも読み返している文学研究（今から思い返すと問題意識はわかるものの、文学研究へのこうした理解そのものはやはりとても一面的だ）に飽き足らず、「より自由」な研究ができそうな駒場への大学院進学を視野に入れて、「わかってくれそう」な桑野先生に進路相談を申し込んだ。駒場の指定された部屋に伺うと、そこにもう一人いらっしゃったのが浦先生だった。ちなみに駒場（の寛容さ）に魅了されすぎて規定の2年間をはるかにオーバーする4年をすでに教養課程で過ぎてしまっていた私は、それにもかかわらず、お二人とはほとんど面識がなかった。そんな無鉄砲な若者が訳も分からず文学研究批判を繰り返すのを、浦先生は「面白いねえ」と、とくに面白そうな顔もせず聞いてくださった。その後お二人から熱心に勧誘されることもなく、私はいわゆる文学研究寄りの、本郷キャンパスにあるスラヴ語スラヴ文学研究室の大学院修士課程に進むことになった。それは尖った問題意識だけはあるようではあるものの、知識も研究や人生設計の展望もなさそうな「野蛮」な研究者志望の学生にとってまず必要なのは、しっかりとディシプリンと基礎知識を身に着けることだという、親心のようなものだったのかもしれないと、お二人には勝手に感謝申し上げている。

なぜその場に浦先生がいらしたのかはしばらく不思議だった。今から考えると、お二人ともロシア・アヴァンギャルド研究の大家だったからではないか（怖ろしくなるが、当時の私にはこの程度の「基礎知識」もなかった）。ロシア・アヴァンギャルドとは、20世紀初頭のロシア革命前後の時期に盛んになった、それまでの文化のありかたを劇的に変革しようとする運動のことだ。まず再考すべき対象は、ロシアの文化や思想のなかで特別な地位を占めてきた文学だった。浦先生は、ロシアにおけるこの文学中心主義、もっと言えばそれに裏打ちされたロシア中心主義や、帝国主義や資本主義の敗者ではあるがそれに対抗する力を秘めているといった類のロシアの神秘化にとっても懐疑的で、違和感を常々口にされていた。「関西人がみんな阪神タイガースファンだと思ったら大間違い」という、宴席での私の粗雑な一般化へのユーモラスなお叱りとともに、こうした先生の姿勢は私のロシア文学・文化研究の根っこをつくっているように感じる。大学院で浦先生のゼミに参加させていただくようになると、Catriona Kelly と David Shepherd の編集による *Russian Cultural Studies: An Introduction* を皆で読むことになった。この出版が1998年だから、当時変わりつつあったロシア文学・文化研究の状況に大変なスピード感で反応されていたことになる。

先生のお仕事として巷間に広まっているのはやはりチェーホフ、スタニスラフスキー、メイエルホリドをはじめとする演劇関連や、文学でも従来の文学観をそととずらすようなものだろう。ロシアの文学中心主義を批判していたからといって文学や文学研究が嫌いというわけではなく、むしろ愛着があるからこそ距離感を探ったり、それらが大きな声となって小さいものたちに沈黙を強いていないか厳しく見つめておられたのではないかと。とくにチェーホフに



筆者書棚から『チェーホフ』『鼻；外套；査察官』

についてのお仕事が有名で、『チェーホフ』（岩波新書、2004年）では19世紀的な物語が解体した後の世界に向き合った作家の姿を浮かび上がらせたほか、作品の翻訳も多い。私の専門に近いゴーゴリでは、何といても『鼻；外套；査察官』（光文社古典新訳文庫、2006年）の翻訳をあげなければならない。ロシア・アヴァンギャルドの一派と言ってよいロシア・フォルマリズムの文学・文化研究者エイヘンバウムの残した古典的な研究（井上幸義訳「ゴーゴリの外套はいかにつくられているか」『ロシア・アヴァンギャルド6：フォルマリズム（詩的言語論）』国書刊行会、1988年）を踏まえながら、ゴーゴリの文体の特徴を見えない語り手の小喃を聞いているようだとし、落語調に訳したものである。戯曲 *Ревизор* が日本語訳で長いあいだ「検察官」と訳されてきた（いかにもゴーゴリ的な）経緯を指摘して「査察官」という題名を提唱されたこととあわせ、決してお仕事の中心ではなかったであろうゴーゴリの世界への理解の深さに膝を打ったし、今も打ち続けている。学生へゴーゴリ作品を薦めるときには必ずお名前をあげさせていただいている名訳だが、同時に、落語風の癖のあるトーンによって、ゴーゴリの語りを持つある種のニュートラルさ、その作品を読む者の身体によって語りがその都度（再）創造される自由さのようなものが少し限定されてしまったような気もしていた。このことをご本人に言い出すのも何だか畏れ多く、躊躇っているまま直接議論させていただく機会はずいぶん永久に失われてしまった。

そのお仕事を CiNii でざっと検索しただけでも、論集や翻訳集、共訳といった共同作業への参加が目立つことに気づく。伊藤愉さんと共訳したエドワード・ブローン『メイエルホリド演劇の革命』（水声社、2008年）のように、若手の研究者や学生、院生をとても大事にされる方でもあった（びっしりと朱で添削されて原稿が返ってきたと伊藤さんに伺ったことがある）。私はロシア留学中で残念なことに一度も参加できなかったのだが、駒場の研究室で夜な夜な開催される「浦バー」には、本当にいろんな人が出入りしていたそうだ。バーとの関連は不明だが、「エイゼンシュテイン勉強会」という研究会がつくられ、本人たちから直接聞いただけでも、前述の伊藤さんに加え、河村彩さん、土居伸彰さん、乗松亨平さん、畠山宗明さん、本田晃子さん、八木君人さんらが参加し、研究会のほかにも加藤有子さんと北井聡子さんたちがいて、現在のスラブ文学・文化研究をリードする（当時の）若手たちがいつも先生を囲んでいた。

浦先生の飄々とした振る舞いにひそむ（チェーホフのような）「優しさ」と「非情さ」の二面性について語る人は多く、2009年にゴーゴリの生誕200周年を記念して日本ロシア文学会第59回大会（筑波大学）で開催されたワークショップ「ゴーゴリ文学への問いかけ」で司会をしてくださった際には、冒頭で「日本では現在のところこの記念の年が盛り上がりすぎてはいません」とおっしゃって苦笑を誘われたものだ。ただ本質的にはとても優しい方だったように思う。近年は松葉杖をつかれるなど体調が良くないようにも伺っていたが、長くかかった私の就職がセンターにようやく決まった時には、「本当に良かったねえ」と優しい笑顔でおっしゃっていただき、「優しさ」をもう隠すことなく示してくださったようで、とてもありがたく、またほんの少しだけ寂しい気持ちにもなったことを覚えている。

チェーホフについての本を書くという踏ん切りがつかず、作家の年齢を追い越した際には焦ったと『チェーホフ』に書かれているが、私もチェーホフの没年を過ぎ、チェーホフと絡めて「老い」の問題について先生に伺いたかったこともたくさんある。これからは、思い出とともに、残されたお仕事に向き合うことで、生前には十分にできなかったと悔いの残る、先生との語らいや共同作業に取り組んでいければと思う。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

学界短信

学会カレンダー

2023年	10月19-22日	Central Eurasian Studies Society (CESS) Annual Conference 2023 於ピッツバーグ大学 https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/
	10月21-22日	日本ロシア文学会第73回全国大会 於富山大学五福キャンパス https://yaar.jp.org/?page_id=1829
	10月28-29日	ロシア史研究会2023年度大会 於九州大学伊都キャンパス https://www.roshiashi.com/annual-conference
	11月4-5日	ロシア・東欧学会2023年度研究大会 於京都大学 https://www.jarees.jp
	11月10-12日	日本国際政治学会2023年度研究大会 於福岡国際会議場 https://jair.or.jp
	11月11日	2023年度内陸アジア史学会大会 於明治大学駿河台キャンパス http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/
	11月30日-12月3日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於フィラデルフィア (10月19-20日にsmall virtual convention) https://www.aseees.org/convention
	12月7-8日	スラブ・ユーラシア研究センター2023年度冬期国際シンポジウム 於SRC
2024年	4月5-7日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Conference 2024 於ケンブリッジ大学 https://www.baseesconference.org

図書室だより

オンラインデータベースの追加導入

前号で、Gale 社の提供するオンラインデータベース Archives Unbound の追加導入についてご案内しましたが、その後、本年 6 月になって以下の 2 つの部編が追加されましたので、お知らせ申し上げます。

いずれも、学内ネットワークに接続した端末から、同時接続数無制限で利用できます。

- Bulgaria: Records of the U.S. Department of State Relating to Internal Affairs, 1950–1954
- Czechoslovakia Crisis, 1968: The State Department's Crisis Files

[兔内]

編集室だより

Acta Slavica Iaponica

第 45 号への投稿は 7 月 16 日に締め切られ、8 本の論文の投稿がありました。現在、査読の作業が進んでいます。[長縄]

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第 70 号が漸く出版されました。出版まで長らくお待たせし、大変申し訳ございませんでした。多様な分野の力作が数多く掲載されております。ウェブ上で閲覧できますので、是非、ご覧ください。現在、2024 年夏の出版を目指して第 71 号に取り組み始めております。[青島]

会議

センター協議委員会

2023 年度第 2 回 5 月 31 日（オンライン開催）

議題

1. 教員人事について

2023年度第3回 5月31日～6月6日（メール会議）

議題

1. 教員人事について

2023年度第4回 7月28日（オンライン開催）

議題

1. 令和4年度支出予算決算（案）について
2. 令和5年度支出予算配当（案）について
3. 研究生の受入について
4. 研究生の退学について

[事務係]

みせらねあ

専任研究員消息

青島陽子研究員は、4/1～4/4の間、BASEES 出席（4/1）および ICCEES Executive Committee（4/2）出席のためグラスゴー（イギリス）に出張。

ウルフ・ディビット研究員は、4/6～4/19の間、資料収集のため、ニューヨーク（アメリカ）に出張。

野町素己研究員は、4/11～4/17の間、資料収集およびラウンドテーブル出席のため、ベオグラード、ブルシャツ（セルビア）に出張。4/20～4/30の間、オハイオ州立大学での講演「2nd International Ohio State – Ca' Foscari Joint Workshop on South Slavic and Balkan languages」（4/21～4/22）、「Kenneth E. Naylor Memorial Lecture Series」（4/24）、資料収集のため、コロンバス（アメリカ）に出張。7/15～7/25の間、職務トレーニング講習（7/16～7/20）、資料収集（7/21～7/23）のため、ポズナニ（ポーランド）に出張。

岩下明裕研究員は、4/12～4/19の間、資料収集、「The WSSA 65th Annual Conference」出席（4/14～4/15）、研究打合せ（4/13）および現地調査（4/16）のため、ハワイ、テンピ（アメリカ）に出張。6/4～6/10の間、The MCC Budapest Peace Forum（6/6～6/7）出席のため、ブダペスト（ハンガリー）に出張。

長縄宣博研究員は、6/23～7/2の間、サマースクール「The Archives of Islam in the Russian Empire (16th–Early 20th Centuries）」（6/25～6/30）出席のため、ウィーン（オーストリア）に出張。

[事務係]

目 次

研究の最前線	1
「14世紀の危機」の語り方：2023年度夏期国際シンポジウム《崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14世紀の危機」を思考する》報告記／「ウクライナ・イニシアティブ」：ウクライナ専門家の招へい／第65回北大祭・研究所・センター合同一般公開として「知られざるスラブ・ユーラシア」開催される／UBRJ/EES実社会のための共創研究センター・名古屋外国語大学RINGS/NPO法人国境地域研究センター合同セミナー「大学教育における地域連携の実践と関係人口」の開催／国際19世紀研究学会INCSA 第1回大会のお知らせ／井上紘一名誉教授がポーランド文化功労章を受章／アダム・ミツケビッチ大学（ポーランド）を訪問して／村上智見助教と博士課程院生のブレンさんが三島海雲記念財団学術研究奨励金を受贈／専任研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	17
諫早特任准教授の就任／研究員・事務職員の異動	
札幌の思い出	19
by ランコ・マタソビッチ	
鮮やかに残る札幌での SRC 滞在を回想して	22
by ロバート・グリーンバーク	
百瀬宏先生のご訪問	25
by 岩下 明裕	
3年ぶりにポーランドを訪問して	29
by 野町 素己	
イリヤ・カバコフ追悼	34
by 生熊 源一	
浦雅春先生を悼む	37
by 安達 大輔	
学界短信	39
学会カレンダー	
図書室だより	40
オンラインデータベースの追加導入	
編集室だより	40
<i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『スラヴ研究』	
会議	40
センター協議員会	
みせらねあ	41
専任研究員消息	

2023年9月15日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	野町素己
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
